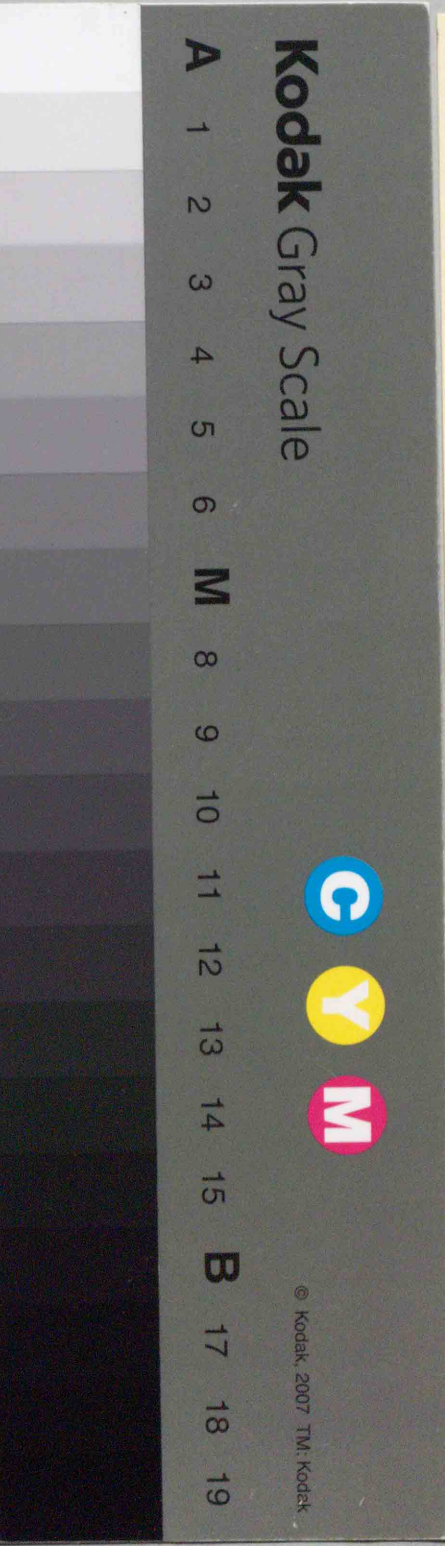
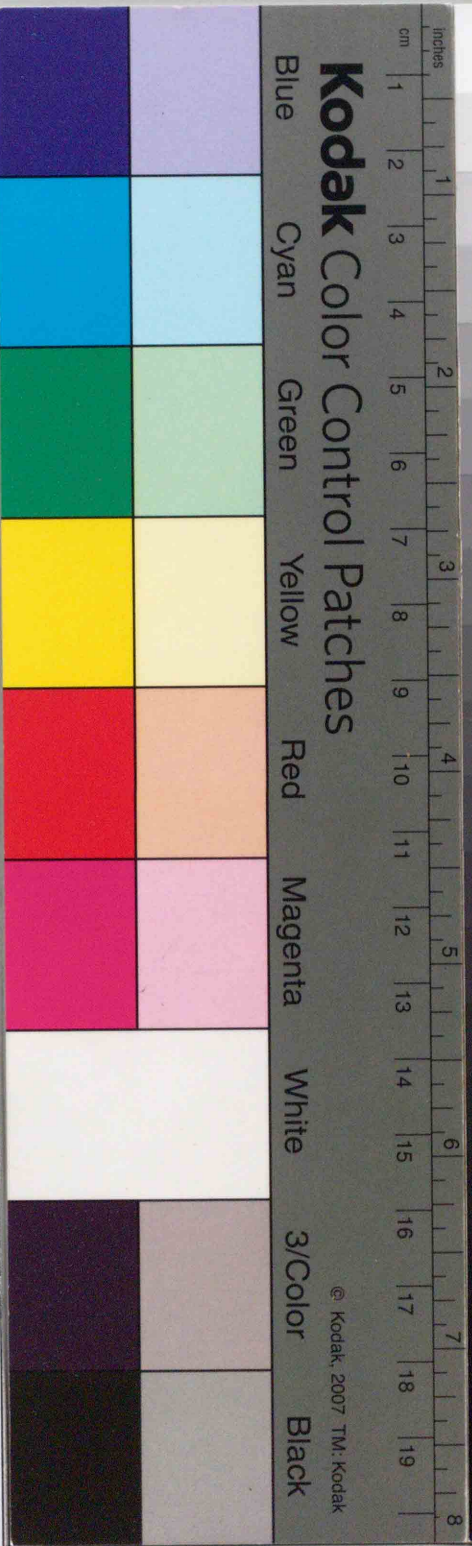


教科書文庫  
4  
810  
41-1931  
2000302041

學 中  
書 科 教 文 國  
六 卷



京 東  
版 藏 館 風 光



41732

教科書文庫

4
810
41-1931
200030 2041





資料室

教科書文庫

4

810

41-1931

2000302041

濟定檢省部文

用科教科文漢語國校學中 日二十二月二十年六和昭

資料室

3759  
Y019

吉田彌平編

中國文教科書

卷六

東京 光風館藏版

広島大学図書

2000302041





學中  
國文教科書卷六

目次

一	自然の愛	藤岡作太郎	一
二	白鳥		七
三	松江の曉	小泉八雲作 落合貞三郎譯	一〇
四	たき火	國木田獨步	一七
五	空行く雁	〔會我物語〕	六
六	會我兄弟	森鷗外	三
七	郷土	相馬御風	五

目次

一





八	崎人一茶	本山荻舟	七
九	花芒	正岡子規	七
一〇	浮島が原	〔義經記〕	八〇
一一	佐藤嗣信	〔平家物語〕	八七
一二	忘れ難き日	姉崎嘲風	九四
一三	友に寄す	高山樗牛	九六
一四	愛兒の死	西田幾多郎	一〇五
一五	雄辯	土田杏村	一二六
一六	流泉啄木	〔今昔物語〕	一三四
一七	鹽原	尾崎紅葉	一三八
一八	吉野の宮	北畠親房	一三五

一九	如意輪堂	〔太平記〕	一四〇
二〇	月の夜さむ	〔新葉和歌集〕	一四九
二一	煤はらひ		一四九
二二	雪前雪後	幸田露伴	一五〇
二三	つれづれ草	兼好法師	一五五
	栗栖野		一五五
	高名の木登り		一五七
	懈怠の心		一五八
	最明寺入道		一五九
	石清水詣		一六〇
	鼎かづき		一六一



二四	笑と涙……………	野口米次郎 一六四
二五	故郷の花……………	〔平家物語〕 一六五
二六	小枝の笛……………	〔源平盛衰記〕 一六九
二七	世界の歌枕……………	上田 敏 一七四
二八	隅田川の水よ……………	島崎藤村 一八五

目次終

中國文教科書 卷六

藤岡作太郎

號は東圃  
國文學者  
文學博士  
東京帝國大學文  
科大學助教授  
加賀國金澤生  
明治四十三年歿  
年四十一

一 自然の愛

藤岡作太郎

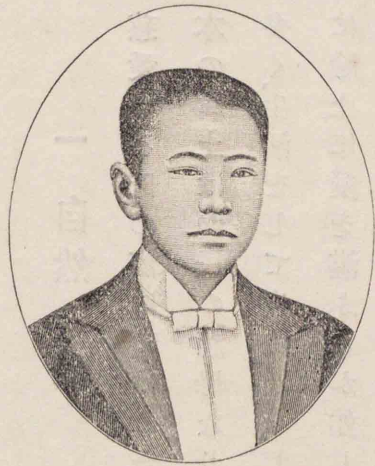
慈愛なる母の懷に養はれたる子は生涯その恩愛を忘れず。日本  
 の風土は國民の慈母なり。地味豊饒にして、河海に魚貝の利  
 多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美溫雅なる山川は常  
 に臉上に愛を湛ふるが如し。接する者はこれに親しみ、親しむ  
 者はこれを慕ふ。愛に迎へらるゝ者は愛を酬いざるを得ず。  
 天然の大公園に住む我が國民がその一木一草を懐かしむは自  
 然の情なるべし。都會の緣日に張りたる夜店には食品・玩具な



カンテラ

Candelaar  
蘭語の「燭臺」  
の訛

どの多かる中に、露を帯びたる植木の葉の翠、花の紅こそカンテラの光に映えてみづくしく鮮かなるを、中流以下の市民はあれこれと買求めて、座敷に飾り、庭に植込む。裏長屋の道具の据



藤岡作太郎

所もなき窓前にも稗苳作りて田舎の景色の面影を偲び、破れ鉢に唐芋を育ててやさしき野趣を嬉しむ。長火鉢の脇の福壽草は鏡餅に對して暖かげに、軒端に吊りたる忍草は風鈴の音と共に涼し。

上下貴賤を通じて自然を愛好すること此の如きは、他の國民に我が國民は母の慈愛をのみ受けて、父の威嚴を知らず。自然のその匹ありや。

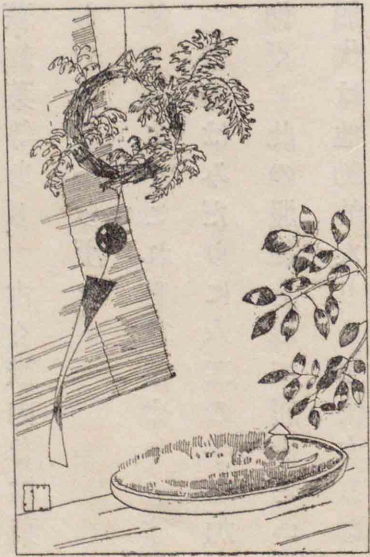
恐しき猪も

和歌こそなほを  
かしきものなれ  
あやしのしづ山  
がつのしわざも  
いひいづれば面  
白くおそろしき  
ゐのしよもふす  
ゐの床といへば  
やさしくなりぬ  
(徒然草)

兼好

俗名吉田兼好  
鎌倉室町時代の  
文學者  
正平五年(1110)  
寂  
年六十九

愛すべきを見て、畏るべきを思はず。野をも垣をも吹亂す二百十日の風も、野分の名にやさしく、峯も谷も一つに埋みてすさまじき冬の山里も、深雪といへばみやびやかなり。「恐しき猪もふすゐの床と稱ふるにやさしく聞ゆ」など、兼好がいへるは、我等が自然に對する此の傾向を説明せるなり。雨といへば照りつゞきたる夏などは嬉しけれど、一日の降も十日の照より飽きくするに、卯の花くたし時雨など、何れも趣ありて感ぜらる。



草忍苳種

自然の愛はかくして現るゝのみならず、その名を借りて屢、人事



に用ふ。文學には源氏物語の卷の名に夕顔末摘花・葵・朝顔・胡蝶・螢・常夏・藤袴・若菜・柏木・鈴蟲・紅梅等あり。菓子に鶯餅・櫻餅・柏餅・萩の餅・紅梅焼・時雨など、枚擧するに遑あらず。今の刻煙草の名にも福壽草・白梅・阜月・あやめ・萩・紅葉等あり。古く獸肉を紅葉といひ、金貨を山吹に譬へたるも、やさしからずや。

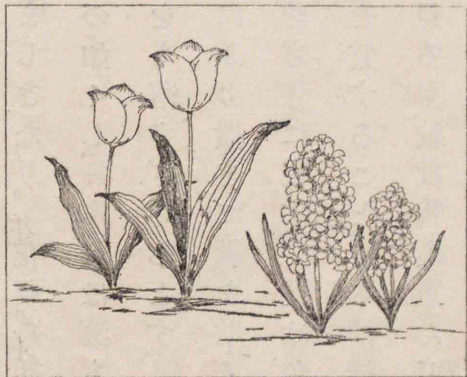
我が國民は自然を愛賞する餘り、又よくこれを尊重せり。尊重するものには悦んで服従す。彼等はみだりに人工の手を加へずして、自然のまゝに自然を仰ぐ。此の服従を以て屈伏といふなかれ。悦服は自動的なり、屈伏は他動的なり。屈伏するものは不平なる奴隸が氣儘なる主人に對するが如く、悦服するものは従順なる兒孫が寛大なる家長を見るが如し。任意的なるものは毫も抑壓の念をその間に感ぜず、他の意を以て喜んで己の

チューリップ  
Tulip  
ヒヤシンス  
Hyacinth

意とす。花に對する我等の趣味が如何に異なるかを見よ。薔薇は枝ながら幹ながらの姿の美はしきにあらず、花一輪の色の艶に、香の芳しきなり。櫻は一枝の趣を賞するより、峯に互り川に沿ひて、雲とたなびきたる態の目ざましきなり。花瓶に挿す時、西洋人は花ばかりをちぎりて手毬の如くし、日本人は葉も枝もその儘に、願はくはこれに置く朝露をも落さざらんとす。一は枝を撓めて花輪を作り、花瓣を卓上にふり撒きて歡を助くるに、一は床上の盆石盆栽に自然の大景を方寸に寫す。彼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多趣なるを賞すること、恰も油繪と水墨畫との異なるが如し。同じ菊を見るも、彼は物を重んじ、此は形を主とすといふ。西洋の草花のチューリップ・ヒヤシンスなど、その葉に何の趣もなくして、その花の妖艶なるは、寧ろ我等



の眼に毒々しと感ぜらる。秋の野の女郎花尾花、その花に何の美しきことかある。されど、有るか無きかの黄花を捧げてなほたよ／＼と下蔭の蟲の音にも揺ぐ様ますほの色はやがて白くほ／＼けて、露に濡れ風に靡く趣は、我が胸にしみて忘れられず。日本人が花を愛するはその外形に非ず、賦色に非ずして、その風情にあり、直ちに自然の懐にわけ入りてその眞實を握るにあり。かくしてこそ自然を愛し、自然を尙ぶなれ。自然に親しむことの深きは、これ日本國民の特性なり。(國文學史講話)



プツリユーチ

スンシヤヒ

## 二 白鳥

落合直文

父と母といづれかよきと子に問へば父よといひて母をかへりみぬ

門松  
ひとつもて君を  
いはむひとつ  
もておやをいは  
はむふたもの  
松 直文

蹟筆文直合落

咲きつゞくすみれたんぽ、なつかしみもと來し道を  
またもどりけり  
ゆく水にしばし流れてもえゆくは誰に撲たれし螢な  
るらん  
さわ／＼とわが釣りあげし小すゞきの白きあぎとに

落合直文

號は萩の屋

國文學者

歌人

仙臺生

明治三十六年歿

年四十三

筆蹟

門松

ひとつもて君を  
いはむひとつ  
もておやをいは  
はむふたもの  
松 直文



尾上柴舟

名は八郎  
國文學者

歌人

書家

文學博士

東京女子高等師

範學校教授

明治九年岡山縣

津山生

筆蹟

すふかきりはる  
ひをすひてはく  
いきにひとのお  
もうつぼたんの  
はなは 八郎

秋の風吹く

膝のうへにこよひも吾兒は眠りたりまづしき親を親  
とたのみて

尾上柴舟

春の日の玉のやうにも照りとほる若竹原に靴の紐結  
ふ



尾上柴舟筆蹟

一つ呼べば一つ應へてつひにみな月の夜蛙なきたち  
にけり  
顔よする車の窓のせまければうへまで見えぬ山のと

若山牧水

名は繁

歌人

宮崎縣生

大正四年歿

年四十五

筆蹟

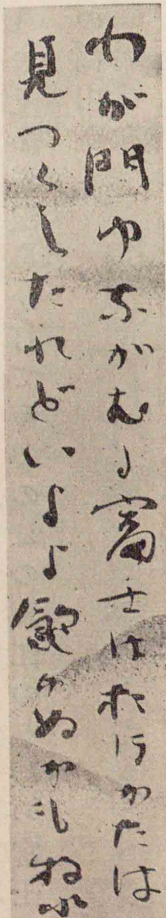
わが門ゆながむ  
る富士はおほか  
たは見つくした  
れどいよ飽か  
ぬかも 牧水

きつせ

つけすてし野火の煙のあかくと見えゆくころぞ山  
はかなしき(伊豆にて)

若山牧水

うす紅に葉はいちはやく萌えいでて咲かんとすなり  
山櫻花



若山牧水筆蹟

春まひるこゝのみなとによりもせず岬をすぎて行く  
船のあり

白鳥はかなしからずや空の青海の青にも染まらずたゞ



小泉八雲

もと英國人  
で舊名ラフ

Lafcadio Hearn  
(1850—1894)  
詩人、小説家、  
カデイツォ、ハ  
カデイツォ、ハ  
東京帝國大學  
文學部教授  
明治三十七  
年歿

年五十五

落合貞三郎

英文學者  
學習院教授

明治八年島根縣  
松江生

よふ  
家をゆすり吹くこがらしのをちかたに啼く朝鳥の聲  
みだれたり  
うねりあふ浪あひ打てる冬の日の入江のうへの富士  
の高山

三 松江の曉

小泉八雲作  
落合貞三郎譯

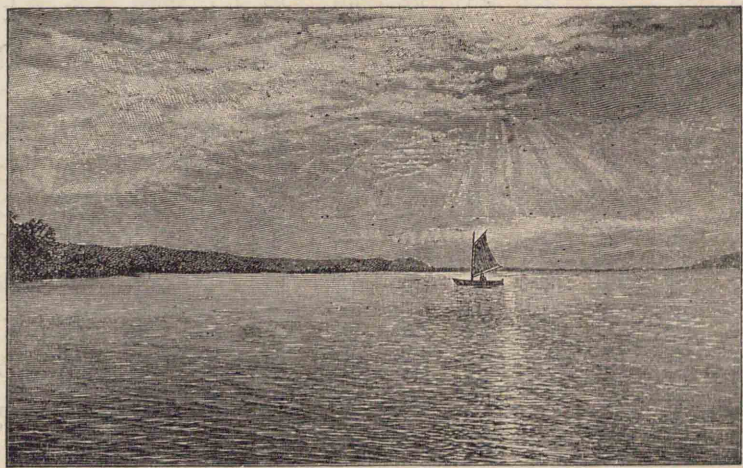
松江で朝の夢を破る最初の物音は、ちやうど耳底でゆるやかな  
大きな脈が搏つやうに響いてくる米搗の音である。杵の落ち  
る響が一定の拍子で洩れてくるのが、日本人の日常生活に伴な  
ふあらゆる音響の中で最も哀れに思はれる。米搗の音は日本

洞光寺  
松江市雜賀町に  
ある曹洞宗の寺

大橋川  
中海と宍道湖と  
の間を通ずる川

といふ國土の脈搏である。  
それから禪刹洞光寺の大きい鐘がごうんと響いて、市街の空を  
揺がせる。續いて私の家に近い材木町の地藏堂から太鼓の寂  
しげな音が晨の勤行を告げる。最後に行商人の物賣の聲、大根  
やい。蕪菁や蕪菁。薪や薪。  
明方のこんな物音に起されて、私は二階の障子を開けて、河畔の  
底から伸びた春の若葉の軟かな緑の雲越しに朝景色を眺めや  
つた。大橋川の幅廣い、鏡のやうな河口が、遠くの方では、わな  
くやうに萬象を映寫して微かに光つてゐる。此の川は宍道湖  
に向つて口を開け、湖は右手へ擴がつて、杳乎たる連丘に包まれ  
てゐる。對岸の日本の家屋は戸が皆閉つてゐるので、恰も箱を  
閉ぢたやうである。夜は明けたが、日はまだ出ない。遙かに見





渡すと、薄色の霞が湖水の盡端に長くたなびいてゐる。その星雲状をした長い帯は、日本の昔の畫で見る通りであるが、實際の現象を眺めたことのない者には、畫工が奇を衒つたとしか思はれないに相違ない。山といふ山をこの霞が蔽うて、峯から峯へ、はて知らぬ長さの紗のやうに横に延びて居る。だから湖水は實際より遙かに大きく、味爽の空の色と入交つた

美しい幻の海となつて見える。山々は霧の中に浮ぶ島嶼で、夢のやうな一帯の丘陵ははてしのない土手道かと怪しまれる。そして霧が立つに連れて、その趣は徐ろに變つて行く。朝日の黄色の縁が見えてくると、今までのよりは更に弱い、細かな光線——分光鏡の紫と青貝色——が水面を射る。梢の上は弱い光を受ける。水のかなたにある高い建物の木地の色が、美しい靄の爲に蒸氣の立つ黄金色へとかはる。

朝日の方へ向くと、澤山橋桁の並ぶ長い木造の大橋の彼方に、一艘の船が今しも帆を揚げようとしてゐる。こんな奇妙な恰好の美しい船を見た例がない。正にこれ蓬萊の夢である、霞にぼやけた船の精靈である。しかし此の精靈は雲と同様、光線を受けて、薄青い光の中で金色に震へてゐる。



庭先の川端から手を拍つ音が起つて来る。一回、二回、三回、四回。その手の持主は植込に遮られて見えない。しかし對岸の埠頭の石段を下りる男や女の姿が見える。めい／＼帯に小さい青手拭を挿んでゐて、顔と手を洗ひ、口を漱ぐ。これは神道の祈を捧げる前に必ず行ふ潔齋である。それから顔を朝日に向け、四たび手を拍つて拜む。長い橋の上からも他の拍手の音が反響の如くに出てくる。遠くにある、軽い優美な、そして新月のやうに彎曲した小舟からも出てくる。この頗る異様な恰好の舟の上から、手も足も裸の漁師が、黄金色をした東雲の空を拜んでゐるのである。最早拍手の數が増して、殆ど鋭い音響の連發となつた。それは人々が今皆朝日——お日様——天照大神を拜んでゐるからである。「いとも貴き日の造主よ。このこゝちよき日光

を賜ひて世界を麗しくなしたまふことを謝し奉る。言葉はこの通りでないまでも、これが無数の人の衷心である。

杵築の大神  
官幣大社出雲大  
社  
祭神は大國主命  
一畑山  
島根縣簸川郡に  
ある名刹  
本尊は薬師如来

朝日に向つてだけ手を拍つ者もあるが、大概是西の杵築の大神に向つてもさうするのである。顔を東西南北に向けて群神の名を低聲で唱へる者さへ随分ある。天照大神を拜んだ後、一畑山の高峰を眺めて、盲人の眼を開き給ふといふ薬師如来の大家藍のある處に向ひ、今度は佛教の儀式に従ひ、掌を合せて軽く擦るものもある。然し日本で最も古い此の國では、佛教徒も亦神道信者であるから、誰も／＼古風な神道の祈の文句を唱へる。

「拂ひ給ひ、浄め給へ」とほ神ゑみため。  
手を拍つ音が歇んで、一日の仕事が始り出し、橋の上にはからころといふ下駄の音がだん／＼高く響いてくる。大橋の上で鳴



る下駄の音は忘れられない音である。――速くて、陽氣で、音樂的  
 で、盛な舞踏の音のやうである。實際また舞踏である。みんな  
 が爪先で歩いて行く。朝日の射した橋の上を通る數へきれぬ  
 人の足がちらく、するのには驚くべき光景である。この足は皆  
 細くて、恰好な均齊を得てゐて、希臘の古甕に描いた人物の足の  
 やうに輕やかである。  
 やがて學校へ急ぐ子供達が出てくる。彼等の駆ける時に、綺麗  
 な飛白の着物の濶い袖が波動するのは、ちやうど大きい蝶が羽  
 搏きをするやうである。親船は白色や黄色の大きい翼を擴げ  
 るし、埠頭の側で夜中眠つてゐた小蒸氣船は煙筒から煙を吐き  
 始める。(まだ知らぬ日本の瞥見)

四 たき火

國木田獨歩

國木田獨歩

名は哲夫

小説家

千葉縣海上郡銚

子町生

明治四十一年歿

年三十八

逗子

神奈川縣三浦郡

にある町

相模灘に臨む

鎌倉町の東南六

軒

御最後川

逗子にある田越

川の別名

六代御前

平維盛の子

平家滅亡の後此

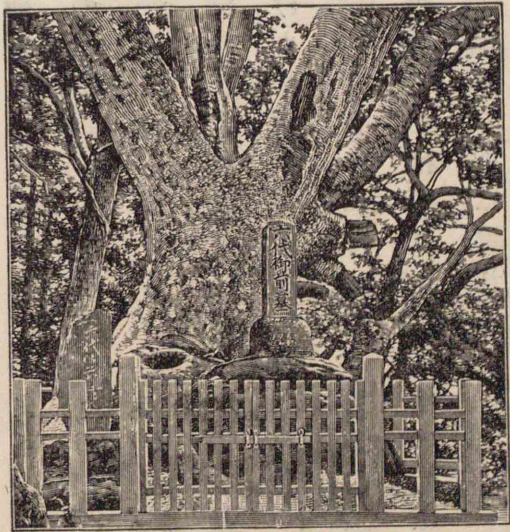
の地で斬られた

北風を背にし、枯草白き砂山の崖に腰をかけ、足投げいだして、伊  
 豆連山の彼方に沈む夕日の薄き光を見送りつゝ、沖より歸る父  
 の舟遅しと俟つ逗子あたりの童の心、その寂しさ、うら悲しさは  
 如何あるべき。御最後川の岸邊に茂る葦の枯れて、吹く潮風に  
 騒ぐ、其の根かたには夜半の満潮に人知れず結べる氷朝の退潮  
 に破られて残り、ひねもす解けもせず、夕闇に白き線を水際に引  
 く。若し旅人、疲れたる足を此のほとりに停めに、何等の感も  
 なく行過ぎ得べきか。見よ、彼處なるは、哀れを七百年の後なる  
 今に惹く六代御前の森なり。風其の梢に鳴れり。  
 落葉を浮べて緩やかに流るゝ此の沼川を漕上る舟、知らず、何れ  
 の時か心地よき。追分の節面白く此の舟より響き渡りて、霜夜



の前ぶれをかなせる。あらず、あらず、只見る、何時もく、物言はぬ、笑はざる、歌はざる、漢子の、農夫とも、漁人とも、見分け難きが、寂しげに、艫あやつるのみ。

鍬かたげたる農夫の影の、橋と共に、臙にこれに映る、かの舟、音もなく、これを搔亂しゆく。見る間に、舟は葦がくれ去るなり。日影なほ、あぶ鐙すり摺の端にたゆたふ頃、川口の浅瀬を、村の若者二人、裸馬に跨りて静かに歩まする、晝めきたるを見ることもあり。かゝる時、濱には見渡すかぎり、人らしきものの影なく、引上げたる舟の舳に



六代御前の墓

鐙摺  
逗子町内にある  
小山

止れる鳥の、聲をも立てて、は翼は打うちものうげに、鎌倉の方さして飛びゆく。

或年の十二月末つ方、年は迫れども、童は何時も氣樂なる風の子、十三歳を頭に九つまで位が七八人、砂山の麓に集りて何事かを評議まぢく、立てるもあり、砂に肱を埋めて、頬杖つけるもあり、坐れるもあり。此の時、日は西に入りぬ。

評議の事定まりけん、童等は思ひく、に波打際を駈けめぐり始めぬ。入江の端より端へと、おのがじし、見るが間に分れ散れり。潮遠く引きたるあとに残るは、朽ちたる板、縁缺けたる椀、竹の片、柄の折れたる柄杓などの色々、皆一昨日の夜の荒の名残なるべし。童等は一々、これらを拾ひ集めぬ。集めて水際を去る程よき處、乾ける砂の上に積みたり。積みたる物は悉く濡れ居たり。



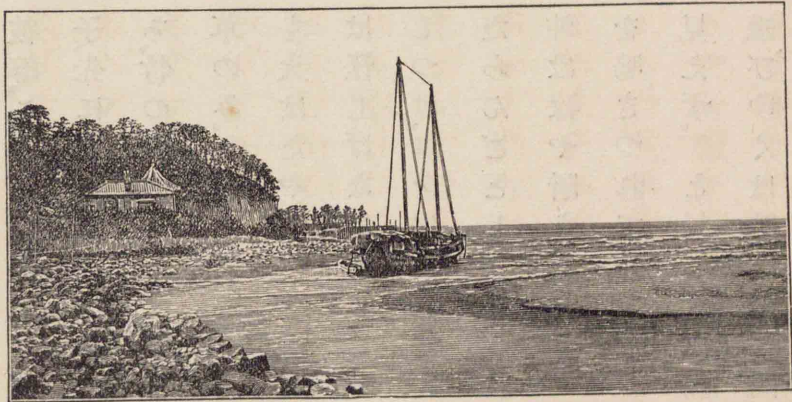
小坪  
逗子町の西端の  
小漁港

此の寒き夕まぐれ、童等は何事を始めたるぞ。日の西に入りてより程経たり、箱根足柄の上を包むと見えし雲は黄金色にそま  
りぬ。小坪の浦に歸る漁船の、風落ちて陸近ければにや、帆をお  
ろし漕ぎゆくもあり。  
硝子の碎け失せたる鏡の、額縁めきたるを拾ひて、これを焼くは  
惜しき心地す。といふ兒の圓顔、色黒けれど愛らし。「こは必ず能  
く燃ゆ。」と、此の群の年かさなる子、おのが力に餘る程の太き丸太  
を置きつゝ言へり。「其の丸太は燃えじ。」と圓顔の子いふ。「いな、  
燃さておくべき。」と、年上の子いきまきて立ちぬ。傍に一人、今日  
は獲ものの何時になく多き様なり。と喜ばしげに叫びぬ。  
童等の願は是等の獲物を燃さんことなり。赤き焰は彼等の狂  
喜なり。走りてこれを躍り越えんことは互の誇なり。されば

江の島  
鎌倉の西の海中  
にある小島

彼等、このたびは砂の彼方より、枯草の類を集め來りぬ。年上の  
子、先に立ちて此等に火をうつせば、童等は圓く火を取巻きて立  
ち、竹の節の破るゝ音を今かくと待てり。されど燃ゆるは枯  
草のみ。燃えては消えぬ。煙のみ徒らに立騰りて、木にも竹に  
も火はたやすく燃附かず。鏡の枠は僅かに焦げ、丸太の端より  
は怪しげなる音して湯氣を吹けり。童等は交るゝ砂に頭押  
しつけ、口を尖らして吹けど、生憎に煙眼に入りて、皆の顔は泣き  
たらんごとし。  
沖ははや暗うなれり。江の島の影も見わけ難くなりぬ。干潟  
を鳴きつれて飛ぶ千鳥の聲のみ聞えて、彼方此方寂しく、其の姿  
見えず。と見れば、夕闇に白きものはそれなり。あわたしく  
飛びゆくは、鳴かの葦間よりや立ちけん。





此の時、一人の童忽ち叫びていひけるは、見よや、見よや、伊豆の山の火はや見えそめたり、如何なればわれらが火は御燃えざるぞ」と。童等は齊しく立ちあげりて沖の方を打守りぬ。げに相模灣を隔てて、一點二點の火、鬼火かと怪のしまるゝばかり、明滅し、動搖せり。これ正しく、伊豆の山人、野火を放てるなり。冬の旅人の、日暮れて途遠きを思ふ時、遙かに望みて泣くは、實に此の火なり。

「伊豆の山燃ゆ、伊豆の山燃ゆ」と、童等節

面白く唄ひ、沖の方のみ見やりて手を拍ち、躍り狂へり。あはれ此の罪なき聲、たそがれ時の寂しき濱に響きわたりぬ。驟く如き波音、入江の南の端より白き線を立てて走り來り、これに和したり。潮は満ちそめぬ。「此の寒き日暮に何時までか濱に遊ぶぞ」と呼ぶ聲、砂山の彼方より聞えぬ。童の心は伊豆の火の方のみ馳せて、此の聲を聞くものなかりき。「歸らずや、歸らずや」と二聲三聲、引續きて聞えけるに、一人の幼き兒、聞きつけて、母呼び給へり、最早打捨てて歸らん」と言ひ、忽ち彼方に走りゆけば、殘の童等また、さなり、さなり」と叫びつゝ、競うて砂山に駆登りぬ。火の燃附かざるを口惜しく思ひ、かの年嵩なる童のみは、後振り返りつゝ、馳せゆきけるが、砂山の頂に立ちて、將に彼方に走り下らんとする時、今ひとたび振向きぬ。ちらと眼を射たるは火なり。



「こは如何に、われらの火燃えつきぬ。」と叫べば、童等驚き怪しみ、立歸りて砂山の頂に集り、一列に並びて此方を見おろしぬ。げに今まで燃附かざりし拾木の、忽ち風に誘はれて火を起し、濃き煙渦まき上り、紅の焰の舌見えつ隠れつす。竹の節の裂くる音聞え、火の子舞立ちぬ。火は正しく燃附きたり。されど童等は最早此の火に還ることをせず、只喜ばしげに手を拍ち、高く歡聲を放ちて、一齊に砂山の麓なる家路をさして馳下りけり。今は海暮れ、濱も暮れぬ。冬の寂しき夜となりぬ。此の寂しき逗子の濱に、主なき火は寂しく燃えつ。忽ち見る、水際をたどりて、火の方へと近づき來る黒き影あり。こは年老いたる旅人なり。彼は今しも御最後川を渡りて濱に出で、濱傳ひに小坪街道の方へ向へるなり。火を目がけて小走

に歩む其の足音重し。

噎れたる聲にて、よき火や。」と幽かに叫びつゝ、杖投捨てて忙しく背の小包を下し、兩の手を先づ焰の上にかざしぬ。其の手は震ひ、其の膝はわなゝきたり。「げに寒き夜かな。」言ふ齒の根も合はぬが如し。焰は赤く其の顔を照しぬ。皺の深さよ。眼いたく凹み、其の光は濁りて鈍し。頭髮も髻も胡麻白にて、塵にまみれ、鼻の先のみ赤く、頬は土色をなせり。あはれ何處の誰ぞや。指してゆくさきは何處ぞ。行方定めぬ旅なるべし。「げに寒き夜かな。」獨りごてる時、總身を心ありげに震はせぬ。かくて温まれる掌もて心地よげに顔を摩りたり。いたく古びて處々古綿の現れたる衣の、火の近き裾のあたりより湯氣を放つは、朝の雨に霑ひて、なほ乾きもあへざりしなるべし。



「あな心地よき火や。」言ひつゝ、投げやれる杖を拾ひて、これを力に片足を揚げ、火の上にかざしぬ。脚絆も、足袋も、紺の色あせたるのみならず、血色なき小指さへ現れぬ。一聲高く竹の裂くる音して、勢よく燃上れる焰は足を焦さんとす。されど翁は足を引かざりき。

「げに心地よき火や。誰が燃しつる火ぞ、忝し。」言ひさして足をかへつ。「十年の昔、樂しき爐見捨てたりしよりこのかた、未だかかる嬉しき火に遇はざりき。」言ひつゝ、火の奥を見つむる目なざしは、遠きものを眺むるが如し。火の奥には、過ぎし昔の爐の火、昔のまゝに描かれやしつらん。鮮かに現るゝものは兒にや、孫にや。昔の火は樂しく、今の火は哀し。あらず、あらず。昔は昔、今は今。「心地よき此の火や。」言ふ聲は震ひぬ。荒々しく杖

を投げやりつ。火を背にし、沖の方を前にして立ち、體をそらせ、兩の拳もて腰をたゝきたり。仰ぎ見る大空、晴れに晴れて黒ずみ、銀河霜を包みて、遠く伊豆の岬角に垂れたり。身うち煖くなりまさりゆき、ひぢたる衣の裾も袖も乾きぬ。あ、あ此の火、誰がもやしつる火ぞ、誰が爲にとて、誰がもやしつるぞ。今や翁の心は感謝の情に満たされて、老の眼は涙ぐみたり。風なく、波なく、さし來る潮の、しみとと砂を浸す音を、翁は眼閉ぢて聽きぬ。さすらふ旅の憂さも此の刹那には忘れつべし。翁が心、今一たび童の昔にかへりぬ。あはれ此の火、やうくゝに消えなんとす。竹も燃盡き、板も燃盡きぬ。かの太き丸太のみは猶よく燃えたり。されど翁は最早これを惜しとも思はざりき。たゞ立去りぎはに、名残惜しくて



や、兩手もて輪をつくり、抱く様に胸のあたりまで火の上にかざしつゝ、眼しばたゝきてありしが、いざとばかり腰打伸し、二足三足往かんとして立還り、燃えのこりたる木の端々を掻集めて火に加へつ、勢よく燃えあがるを見て、心地よげに打笑みぬ。

翁のゆきし後、火は紅の光を放ちて、寂寞たる夜の闇のうちに覺束なく燃えたり。夜更け、潮満ち、童等が焚きし火も、旅の翁が足跡も、永久の波に消えゆきぬ。(武藏野)

### 五 空行く雁

頃は人皇第八十一代安徳天皇の養和元年、あらたまの年立歸りて、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。或夕暮、箱王は母の膝の上に戯れながら、いかに母御前、父はいづくにおはしますぞ

一萬 曾我十郎祐成の幼名  
箱王 曾我五郎時致の幼名

父

河津祐泰  
祐親の子  
安元二年(一一八六)  
工藤祐經の部下  
に殺された

曾我殿  
祐信

工藤一藤  
祐經

鎌倉殿  
源頼朝

や。其の佛は何國にましますぞや。行きて拜み奉らばや。母御前、いざさせたまへ。といひければ、遙かに忘れたる空も今更思ひ出されて、消えいるばかりなり。母泣くくゝのたまひけるは、「あの曾我殿こそ己等が父にてあれ。」と心強く語られけれども、涙に咽びて、陳じやる方ぞなかりける。箱王重ねて申しけるは、「父御前は、まことやらん、狩場より歸りたまふ道にて、工藤一藤とやらんに射られて死にたまひぬ。と兄御前は語らせたまふぞや。當時鎌倉殿の切りものにて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや思ふらん。我等が此の里にあるを知らずや過ぐらん。など大人しく語れば、母より始めて女房たちまで、皆袖をぞ絞りける。かくて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄



弟二人庭に出て遊びけるに、五つ連れたるかりがねの南をさして飛びゆくを見て、一萬申しけるは、あれ見たまへ、箱王殿。空



曾我重廣兄弟飛雁會見圖  
安藤重廣兄弟飛雁會見圖

殿は弟、我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありきとか

に飛ぶ翼も、別の翼ぞ交へぬ。五つあるは、一つは父、一つは母、三つは子どもにぞあるらん。物言はぬ鳥類だにかくの如し。我等人倫に生れながら、和

や。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。我々より幼き者も、馬鞍弓矢を以て物を射ありく事の羨ましさよ。これらの事ども思ひ續くれば、いつよりも今宵は父御前の戀しく思ひ参らせらるるぞや」とて、袖に顔を差入れてさめくと泣きければ、弟も小賢しく顔をあはせて泣きゐたり。一萬の乳母の女房之を聞きて、「あなあさまし、人もこそきけ。いかに和上藤たち、夜も更けぬるに、さやうにはおはするぞ。とくく入らせ給へ」と恐しげにいひければ、二人の者は門外に逃げいでて、思ふやうに飽くまで泣きて後に、内に入りけり。

其の後は、二人の者ども我が身の程を知りぬれば、世になき父を慕ひつゝ、語りあはするまではなけれども、唯目ばかりを見合せ



て、互に袖をぞ濡しける。未だ十歳にも満たざるに、あはれは深く思ひ知りけり。或時兄弟は竹の小弓、薄矧の小矢を取添へて遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに二人立向ひ、あなたこなたに射通して、一萬箱王に申しけるは、我等もいつか成長して、和殿は十三、我は十五にだにもならば、如何ならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如く刺合ひ、射取りて後には、ともかくもなりなん。和殿も弓をよく射習ひたまへ、我も習はん。弓矢は男の一の能にてあるなるぞ。といひければ、弟も打額きけり。年ばへには恐しき事かなと人々思ひけり。(會我物語)

六 曾我兄弟

第三幕

森 鷗外

森 鷗外  
名は林太郎  
醫學者  
文學者  
醫學博士  
文學博士  
陸軍軍醫總監  
帝室博物館總長  
石見國津和野生  
大正十一年薨  
年六十一

幕の外

十郎五郎登場。續松を把る。

十郎 見て置いた、これは假屋ぢや。油斷いたすな。

五郎 心得てござる。

十郎 こりや、五郎。父上がお討たれなされてから、十七年の久しい間、我々二人が念頭を、離れぬ遺恨を霽すは今ぢや。

西王母が園の桃は

三千年に只一度

花を開くと傳へ聞く。

五郎 又金輪王の出づる時

現るといふ優曇華も、

稀に逢ふ日の譬なり。

金輪王  
佛教で須彌山の  
四洲を統治する  
帝王といふ

西王母  
漢の武帝の頃の  
仙女



十郎 待ちに待つた當の敵、左衛門尉は言ふに及ばず、いで逢ふものに容赦はいらぬ。ぢやが、女ばらも許多ある。逸つて無益の殺生すな。

五郎 仰しやるまでもござらぬ。

十郎 いざ。

五郎 いざ。

(二人幕を裏けて入る。)

板戸をさしたる假屋の縁の前

十郎五郎登場。

五郎 兄上、敵はどこへ参つたてござらう。

十郎 (左手を顧みる。) 晝酒飲うでをつたのは、今の假屋ぢや。それ

にあの通、人影も無い。彼奴<sup>か</sup>我等が寄せると悟つて、急に臥戸を換へたと見える。はて、どこを尋ねたものでござらう。

五郎 此の上は是非もない。

假屋々々を片端より捜すまでぢや。

十郎 待て。大切の場ぢや。

(假屋の板戸を開き、龜鶴燭を乗りて登場。)

龜鶴 波に漂ふ沖津舟、



會我十郎舞臺姿

しるべの山はこなたぞや。

十郎 さては龜鶴がしるべいたすか。五郎、續け。いざ。

五郎 しゃ。



〔龜鶴入る、十郎五郎續き入る。夜廻の卒二人、一人は右手より、一人は左手より登場。〕

第一の卒 や。これはお役目御苦勞ぢやの。

第二の卒 お互ぢや。〔板戸の方を見る。〕こゝはどなたやらの假屋ぢやつたの。

第一の卒 こゝか。不斷はお屋形の宿直の人達が、代り合うてさがつて息まつしやる處ぢやが、今夜は工藤殿が客人（客らうど）としよに這入られた。

宮司

備中吉備津宮司  
大藤内成景

第二の卒 客人といふのは、あの象のやうに太つた宮司殿か。

第一の卒 さうぢや。あゝ又降つて來た。どりや一廻してしまはうか。

第二の卒 そんなら又後に逢ふぞよ。

〔卒二人入り違ひて退場。大藤内板戸を蹴放ちて登場、十郎五郎續きて登場。〕

大藤内 お主達は曾我の同胞ぢやな。工藤殿を殺した下手人はわしが見極めた。後日に異論を言ふまいぞ。

十郎 何を。

〔十郎、大藤内を一刀切る。大藤内俯臥になる。五郎腰を切放す。〕

五郎 馬は吼え

牛は嘶く

世なればや、

足二つもて

四つに這ふらん。

十郎 〔笑ふ。〕こやつ、平家の世盛には、妹尾（妹尾兼康）に附いて榮を求め、その罰に召放された領地を、又工藤の手で取返しをつた。世渡

妹尾  
妹尾兼康  
平家の士



上手め。四這に這うて世を渡れ。

(十郎五郎共に笑ふ。)

もうこれまでぢや。潔く名告つて討死せう。

五郎 さうぢや。兄上、いしくも言はれた。

十郎 やあ。假屋の人々。

かねて音にも聞きつらん、

目のあたりには今し見よ。

伊豆の國人河津の次郎祐親には孫、三郎祐泰がわすれがた

み、養家の氏を冒して曾我の十郎祐成、

五郎 同じく五郎時致、只今假屋の内に於て、父の敵工藤左衛門尉

祐經を討取つたり。

十郎 我と思はん人々は、

疾うくこゝにいで合ひて、

二人 御討留め候へ。

(二人暫く屏息して物音を聞く。)

五郎 誰も出ぬではござらぬか。

十郎 無下のものぢや。さらば馳廻つて名告らう。五郎まゐれ、

將軍家の屋形。 葎の外板縁。 雨。

五郎登場。

五郎 兄上。 兄上。

仁田の聲 (舞臺の背後にて) やあ。假屋の人々承れ。狼藉ものの一

人祐成は、伊豆の國人仁田の四郎忠常が討取つたり。

関の聲 (同上) えい、おう。

五郎 はつ。兄上はお討たれなされたか。此の上は祖父様を自



滅させ、敵工藤を最辰せられた將軍家を一太刀恨まう。さ  
うぢや。

(五郎縁に登る。五郎丸被<sup>かぶ</sup>衣を被りずれ違ひ被衣を脱ぎ、背後より五郎を抱く。  
五郎板縁をふみ抜く。二人無言にて揉合ふ。)(幕)

### 第四幕

將軍家の屋形。垂簾。簾の下には諸大名左右二列に坐す。中央前景に狩野  
介宗茂新開<sup>しんがひ</sup>荒二郎忠氏ゐる。

第一の大名 最早辰の刻になつてござる。犯人を預つた大見の  
小平太はどう致いたやら。(第二の大名に) 固より曾我の殿  
原は奸盜・山賊の類でもござらぬに、笑止にも繩附になり申  
した。

第二の大名 情ない儀でござる。よしや御假屋を汚したとて、討

つた工藤は父の仇ゆゑ、申し宥める道もござらう。御屋形  
の御座所近く推參致いたと申すからは、罪科は所詮逃れま  
すまい。

(雑色登場。)

雑色 只今これへ曾我の五郎を召連れてまゐりまする。

(雑色退場。五郎登場。大見小平太實政繩を取る。狩野座を進む。)

狩野 曾我の五郎、承れ。只今これへ召されたは、某と新開とが承  
つて、敵討の宿意を尋ねる爲ぢや。さあ逐一に申し立てい。  
五郎(怒る。)だまれ、狩野介。祖父伊東の次郎祐親が將軍家と不和  
のため自滅に及んでから以來、久しく落魄いたいてをるが、  
某とても遠祖左大臣藤原の武智麿が流を汲む、由緒ある身  
分ぢや。申す程の事はぢきに申さう。若しそれがかなは

武智麿  
不比等の子  
藤原南家の祖



ぬなら、何事も申すまい。

狩野 怪しからぬ事ぢや。某は君命によつて尋ねる。

新開 それを彼此申すのは、犯人の身となつてもまだ君に楯つく  
所存か。

頼朝の聲 (簾の内より) いや、待

て狩野、新開。曾我の

五郎が申す條尤もな

れば、頼朝みづから聽

いて遣はす。

(簾を半ば捲く。頼朝

登場。舍人二人、近臣二人隨ふ。狩野退く。新開中央に残る。)

五郎 (新開に) そこを退いて貰はう。これより物申すに、和殿がそ



曾我五郎舞臺姿

れにゐては、和殿に物言ふに似て、快うない。

將軍 新開退いて遣はせ。

新開 はあ。(新開退く。)

將軍 見れば昨夜の雨に、その土は濕つてをる。誰かある。曾

我の五郎に敷皮を取らせい。

卒 はあ。(卒右手より敷皮を持出で、敷く。)

五郎 (感激す。)

此の敷皮を見るにつけ、

十年の昔ぞしのぼる。

年頃六波羅に勤仕して、平相國親子の覺めてたく、名利のため  
めに訴訟を構へ、怨毒によつて殘害を行つた、小賢しき敵工  
藤が、時勢の移り變るに乗じて、宇佐美殿によつて御目見え

平相國親子  
平清盛とその子  
宗盛



を賜はり、伊東の莊を拜領し、猶それにも飽足らいて、我々兄弟を殺さうと、讒舌を揮うた爲、

兄一萬は十二歳、

此の箱王は十の時、

由比が濱邊に伴なはれ、

引据ゑられし敷皮は、

夢見ごちに春を待つ

荅を摧くだきし悲涙の座。

今は首尾好く父の仇工藤を討つて怨をはらし、此の世に思ひ置くことなければ、

最期を急ぐわが爲に、

此の一枚いっまいの敷皮は、

父に見えん彼岸かみぎに

渡す弘誓くわんげいの舟筏。

有難く拜領いたす。(歎く)

將軍 殊勝な覺悟ぢや。然らばみづから尋ねるが、此の度工藤を討取つたのは、年頃の企か、但しは俄かの思立か。

五郎 それは申すまでもない事。我等が父を討たれたは、十七年の昔。兄は五歳、某は三歳、しかと意趣をも存ぜんのだが、兄が九つ、某が七つになつて、物心を辨へてから以來このかたは、片時忘れぬ復讐でござる。

將軍 然らば伊豆にある工藤が、十年の久しい間、月に四五たび、乃至十度も鎌倉へ通うたに、なぜ途中では討たなんだ。

五郎 いかにも其の往返には心を附け、足柄箱根・大磯・小磯・由比・小



坪のあたりにたゞずみ、兄弟附け狙うたが、身分ある彼が同勢、多き時は百騎に餘り、少なき時も五六十騎、衆寡敵せず控へ申した。

將軍 ふん。さもあらう。扱工藤は父の仇ゆゑ子細ないが、多くの麾下の侍をば何故妄に傷つけた。

五郎 固より我等兄弟は、かゝる狼藉を企てたからは、又向ふものあらん限、千萬騎をも切りなびけうと存じたが、我等の名告る聲を聞いて、足の立所も知らず逃げ行くゆゑ、後日のため一太刀づつ印を附けたまででござる。

將軍 して、大藤内はなぜ討つた。

五郎 あれは笑止なものでござつた。恩ある工藤に助太刀もせず、廣言を申したゆゑ、切りすてはいたいたが、所領安堵を喜

んで下國する途中、報謝のために引返したは、せめてもの心掛、今はなか／＼不便に存ずる。  
將軍 神妙な詞ぢや。ぢやが、それ程義理を辨へたそちが、既に敵を討つた上、なぜ予が座所に踏込んだ。

五郎 これは憚ある申し條かは存ぜぬが、流人となられた將軍家の御爲には、祖父伊東の次郎は東道主人ではござらぬか。それが、成行とは申しながら、三浦殿に預けられて自滅致いた。又敵工藤は格外の御引立を蒙つた。これらの遺恨なきにあらねば、一太刀お恨み申した上で、自害いたす覺悟でござつた。

將軍 おう。好う藏さずに申したぞ。此の度の企を前以て存じてをつた同志のもの、乃至手引のものがあらう。事の序に

伊東の次郎  
名は祐親  
祐家の子  
治承四年(1134)  
自殺した  
三浦殿  
名は義澄  
義明の第二子  
正治四年(1144)  
歿  
年七十四



それも申せ。

五郎 さやうなものは一人でもござらぬ。

將軍 さはいへ、母には打明けたであらうな。

五郎 こは仰とも存ぜぬ。鳥獸も子をば思ふ。二人の子供に死にに往けと申す親のござらうや。

將軍 おう。一族否運に陥つたそちが申し條としては、一々尤も至極に存ずる。仁田の四郎はをらぬか。

仁田の聲 (上手背後にて) はあ、四郎忠常只今それへ。

(仁田、首桶を持ち登場)

仁田 仰によつて曾我の十郎が首級、これに持参いたいてござる。

將軍 五郎。兄に逢はせて遣はずぞ。それ、いましめ解け。

(天見、五郎の繩を解く)

仁田 實檢の上申し請ひ、和殿に見せる十郎が首級ぢや。いざ對

面いたされい。(首桶を開く)

五郎 懐かしや、兄上。

點し列ねし松の火の

消えなば共にと思ひしに、

不覺を取つて縛められ、口惜しくもながらへ申す。さるにても、兄上、どうしてお討たれなされたか。よし仁田殿は猛くとも、時致だに居合はせたら。

仁田 いや。和殿の助太刀までもない。十郎が鋭き太刀風に、某は切りまくられ、右の肘と小鬢とに薄手をさへ負うたれど、十郎が運拙く、我が薙刀に拂はれて、又はほつきと鍰元から、五郎なに。兄上の太刀が折れたとか。なぜ我が太刀を兄上に



佩かせなんだか。

仁田 おう。その悔み道理至極ぢや。某とても一門の十郎ゆゑ、首討つ所存はなかつたが、引かうといつた某を、十郎みづから呼止めて、首を我が手に授けたのぢや。  
五郎 さてはよしみある御身が手に、兄上好んで掛られたか。

(五郎歎く。犬房丸鞭を持ち走り出づ。)

犬房 父上の敵、思ひ知れ。(五郎を鞭うつ。)

五郎 や、この小童は何者ぢや。(五郎睨む。犬房たじろく。)

仁田 犬房丸、御前ぢやぞ。

五郎 なに、犬房丸が御身か。

彼も人の子、穉くて

親を討たれし悲みは

いかでか我に異ならん。

果報の繩に引かれずば、

刃を取りて立向ひ、

御身に討たれん我が身なり。

刑場の土になるわしぢや。せめてもの心遣りに、さあ、其の

答で打つてくれい。

犬房 父上を討つたお前は強い人ぢやと思うたに、優しい事を言うて下さる。それではどうも打たれませぬ。

五郎 おう。さうか。さあ、につくい小わつば、打たれるなら、打つて見い。

犬房 なんの打たいで。おのれが、おのれが。(連打す。)  
將軍 もう好い、好い。犬房、それで堪忍いたせ。



閩外の職  
上古王者之遺、  
將也、跪而推、  
曰、閩以內者寡  
人制之、閩以外  
者將軍制之。  
(史記、馮唐傳)

大房 はつ。(鞭を棄てて平伏す。)

將軍 五郎。此の上問ふべき事もないが、頼朝閩外の職を辱うして、勇士猛卒を惜むこと何物にも譬へられぬ。どうぢや。志を飜して奉公致してくれまいか。

五郎 それは存じも寄らぬ事。若し處刑を宥められて、行住心に任せるなら、某は犬房に此の素首を取らせ申さう。犬房が討たいでも、

近き恵に代へられぬ

遠き恨のまつはれば、

いつ謀反人にならうも知れぬ。一しよに死なうと誓うた兄を、久しう待たせるも心苦しい。首刎ねられるを待つ外ござらぬ。(大見に) さあ繩を打たれい。

大見

いや、某は五郎丸が掛けた儘の御身の繩を、君命によつて預り、又君命によつてほどいたばかりぢや。御身に繩打つすべを知らぬ。

將軍

待て、勇士を失ふは遺恨ながら、其の志は奪ふべからず。五郎が繩は頼朝が手づから打つて遣はさう。

五郎

(居直る) こは思ひも掛けぬ仰ぢや。今生の思出に、さあ御繩を拜領致さう。

將軍

(起つ) わが打つ繩は不動の縞索、難伏のそちには、相應はしからう。いでく。

(階を降らんとす。幕)

(鷗外全集)

相馬御風  
名は昌治  
文學者  
明治十六年新潟  
縣糸魚川町生

七郷土

相馬御風



郷土といふものの人間の心を惹きつける作用は、今更ながら不思議なものである。一方に、

「月日は百代の過客にして、行きかふ年も亦旅人なり。船の上  
に生涯を浮べ、馬の口とらへて老を迎ふるものは、日々旅にして旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思止まず。」  
といひ、或は、



松尾芭蕉

芭蕉

松尾桃青

俳聖

伊賀國上野生

元祿七年(三五四)

歿

年五十一

初めの老

四十歳

伊陽

伊賀

「羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん。これ天の命なり。」

などといつてゐた彼の芭蕉でさへ、他方に於ては、

「代々の賢き人々も故郷は忘れ難きものにおもほえ侍るよし。

我今は初めの老も四年過ぎて、何事につけても昔の懐かしき

まゝに、同胞のあまた齡傾きはべるも見捨てがたくて、初冬の

空の打ちしぐるゝ頃より、雪を重ね霜を経て、師走の末伊陽の

山中に至る。猶父母のいまそかりせばと慈愛の昔もかなし

く、思ふ事のみあまたありて、

「故郷や臍の緒に泣く年の暮」

などといつてゐる。

故郷は蠅まで人をさしにけり



故郷は西も東もばらの花  
といつた風に、永い間自分の故郷を呪つて、旅から旅へと漂泊し  
てゐたあの拗ねものの俳諧寺  
の一茶ですら、晩年には、

これがまあ

つひのすみかか

雪五尺

などと驚きながらも、其の雪深  
い信州柏原の郷里に歸り住ん  
で、そこで一生を終へた。

更にかの近世稀有の歌僧と謂はれる越後の良寛和尚の如きも、  
二十二歳から四十三歳までの二十餘年間の雲水行脚の旅にあ



春甫墨信爾

茶 一 林 小

一茶  
小林彌太郎  
俳人  
信濃國柏原生  
文政十年(一四六七)  
歿  
年六十五

良寛  
歌僧  
越後國出雲崎生  
天保二年(一四九一)  
寂  
年七十四

きたらないで、それ以來ずつと越後の郷里に孤獨な庵住生活を  
續けて、靜かな往生を遂げてゐる。

故郷へ行く人あらば言づてむ

けふ近江路をわれ越えにきと

草枕夜ごとに結ぶやどりにも

むすぶは同じふるさとの夢

などといふ彼の旅中の歌を讀んでも、いかに彼が故郷を慕ふ思  
の切なるものであつたかを察することが出来る。

二十三歳で妻子を振棄てて佛門に歸し、諸國修行の旅に出た西  
行も、

柴の庵のしばし都へかへらじと

思はむだにもあはれなるべし

西行  
俗名佐藤義清  
歌僧  
建久元年(一五〇)  
寂  
年七十三



世の中を捨てて捨て得ぬ心地して

都離れぬ我が身なりけり

などと歌つて居り、且晩年には都に歸つて死んだ。

かういふ風に、昔から代表的な漂泊の人々として知られた此等脱俗の人々さへも、不思議に彼等の生れ且育てられた郷土に對しては、しかく切なる愛慕の情を持つてゐた。そもく此の郷土の、人間に對して持つてゐる魅力は、どこから來るのであらうか。

郷土が私たちの心を惹きつける點は、どういふところにあるか。その地の自然が、他の何れの土地よりも風景の美に於て優れてゐるためかといふに、必ずしもさうではない。人情が特に他の何れの土地のそれよりも醇美であるためかといふに、それも然

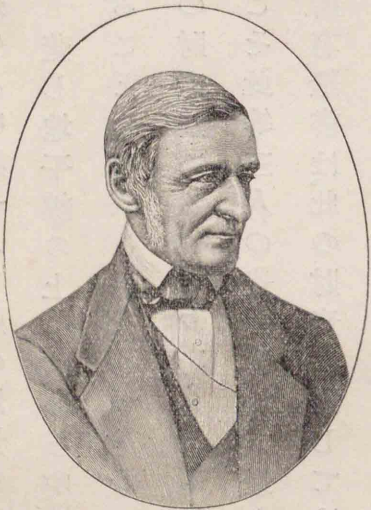
りとは言へない場合が少なくない。それでは何か特別に自分の生活に都合のいゝ外的條件がある爲かといふに、それも必ずしもさうばかりとは言へない。さうかといつて、私たちは、理智的に考へて、故郷は大切なものだと思ひ、判断してから後に、故郷を慕つてゐるとは猶更考へられない。

然らば、人々は何故に自分の郷土といふものに心を惹かれるのか。それは全く「何とはなしに」である。理智的判断によるのではなく、功利的の見地からでもなく、或は特に美的判断が然らしめるといふでもなく、それはたゞ「何とはなしに」である。郷土の人心を惹きつける魅力は、實に此の何とも言ひあらはされない所から發する。それは自然と人間と、過去と現在とを一つに融かした一種不可思議な、音樂的な、詩的な魅力である。又私たちが



郷土を慕ふ心は、全く自分にもよくわからない内心自發の情緒である。此の不可思議な情緒の存在してゐる事實は、恐らく如何なる理智の人と雖も否定することは出来ないであらう。けれども、今の時代には追々此の自分の郷土といふものを失ひつゝある人が多くなりつゝあることも、亦明白な事實である。私は常に、漁夫に取つて、海は單に彼等に生計の資を與へる爲のみの場所ではなくして、又實に彼等に取つての貴い心の糧を與へる領土であると思つてゐる。全く漁夫ほど海を愛することの切なものはない。海は實に彼等に取つては離れがたい心の世界である。それは、農夫に取つて山野・田畑が單に彼等の生計の資を得る場所でないと同じである。外に愛慕すべき郷土を失ふことは、同時に内に心靈の故郷を失

Emerson  
(1803-1882)  
アメリカの  
思想家  
詩人



よく引合ひに出す言葉であるが、私にはどうもエマーソンの自然論の中の左の一節が忘れがたい。

ふことである。漁夫に取つて海は單に生計の資を得るのみの場所と考へられる時、漁夫は即ち心の故郷を失ふのである。農夫が山野・田畑を生活の爲の資を得る場所とのみ考へる時、農夫は心靈の郷土を失ふのである。

「……樵夫の伐る一箇の材木と詩人の見る樹木との間に區別を生ずる。私が今朝見た愛すべき風景は疑もなく二十・三十



ほどの農圃から成立つてゐる。甲は此の畑を所有し、乙は彼の畑を所有し、また丙は向ふの森林地を所有してゐる。しかし彼等の中誰一人も此の風景を所有するものはないのである。蓋し地平線の上には、あらゆる部分を全きものに統べて観ることの出来る眼をもつた者の外には何人も所有せぬ一つの財産がある。即ちかくの如き人は詩人である。此の財産こそ此等三人の農圃に於て最も優れたものであるが、彼等の所有證書は、此の財産に對しては何等の権利をも與へぬのである。」

此のエマーソンの所謂二つの心を合はせ持つた人々が最も幸福な農夫であり、樵夫であり、漁夫であると私は思ふ。樹を材木として伐る樵夫は、同時に樹木を全き一つの物として眺め得る

詩人であるのに何の差支があらう。海を漁りの場所とすると同時に、其處を心の郷土として愛することの出来る漁夫が、最も幸福な漁夫であるべきである。

郷土に定住してさういふ幸福を見出し得る人は、眞に郷土を有する人だともいへる。私たちには、さういふ人々の生活が最も懐かしく思はれる。

長い間アメリカへ往つてゐた一人の藝術家が、久しぶりに故國の自然や人間の生活を、彼の新鮮な眼で眺め直した印象記を書いた中に、日本の農民の生活について書いた次の如き一節があった。

「彼等はどうな仕事の中にも、きつと楽しみを見つけ出す。さうして其處へ彼等の藝術を加味する。日本の百姓がその農圃

彼等  
日本人



君の國  
アメリカ  
ヒロシゲ  
安藤廣重  
江戸後期の浮世  
繪師  
安政五年(五二〇)  
歿  
年六十二

を藝術的に耕すことは、本當に君の國の園丁が花園を作るほ



東海道の平塚  
安藤廣重筆

どに繊細な美的注意を拂つてゐる。あのヒロシゲの繪で有名になつた東海道を汽車に乗つて旅をして見ると、

兩側の田圃は、みんなかはいらしい庭園だ。そこには此の國の百姓が仕事を樂しんだ跡が、鮮かに残つてゐる。

君の國の勞働者が仕事を苦痛だと思つて、早く晝間の八

時間が過ぎて、自由なる夕暮の來るのを待つてゐるあの心持に比べると、日本人は、まことに幸福な生活をしてゐると謂はなければならぬ。

日本の百姓だとして皆が皆さうだとも謂へまいけれども、併しさういふ詩人の心を持つた人々のなほ多くあることは、否むことの出來ない事實である。私たちは此の貴い事實を祝福せずにはゐられない。

西洋のある哲學者の書いたものの中にも、こんな一節があつた。「ロシヤとの戰爭中、粗末な米の飯を有難がつてゐた日本の兵士は、何かの機會に僅かばかりの草花でも見ると、ヨーロッパの遠足家のそれにもまして一種の精神的更新を感得したといふことである。一體ヨーロッパの遠足家といふものは、無慈悲にも自然の最も美しい春の着物である草花を汚したり、



さまざまの樹木や記念物を傷つけたり、卓子や椅子などにまで容赦なく自分のつまらない名前などを彫りつけたりして、彼等自身を楽しませてゐる輩である。

私たちは、一般のヨーロッパ人が、それほど自然を愛し得ない人たちであるかどうか、事實を知らない。しかし、私たち日本人が一般に自然を愛する切なる心を持つた民族である事實は信じて疑はない。自然は何といつても私たちの心の故郷である。脚氣患者が郷里に歸ることによつて何時となしに健康を恢復することが出来るやうに、私たちの傷ついた心は、魂は、心の底から自然を愛し、自然に懐かしむことによつて、その健康を取戻すことが出来る。

自然を魂の郷土として懐かしむことの出来る幸福を、私たちは

永遠に失ひたくない。私たちは自分にも、また自分の子供たちにも、永遠に郷土の有する魅力を失はせたくない。郷土は私たちの爲の搖籃であつて、また墳墓であるべきである。(對山雜記)

### 八 崎人一茶

本山 荻舟

享和某年にぶらりと又江戸へ出た一茶は、藏前の札差で井筒屋八右衛門といつた夏目成美の許を訪ねた。

「信州の竹阿と申すもの、御主人御在宅ならお目に懸りたい。」

店に居た番頭が、みまわ服装を見て眉を顰めながら、さも無愛想に、

「どんな御用ですか。」

「別に用事といふではござらぬが、風流の道に遊ぶ者、御高名を慕うてお訪ね申したのぢや。」

本山荻舟  
名は仲造  
文藝家  
明治十四年岡山  
縣生  
享和  
光格天皇の御代  
(一四六—一四六三)  
夏目成美  
俳人  
江戸生  
文化十三年(一四七  
七)歿  
竹阿  
その頃の一茶の  
號



御厩橋  
隅田川に架けて  
ある橋

「さうですか。それは折角でしたが、生憎主人は、近頃病氣で寝  
んでゐますから、とてもお目には懸れますまい。」

「ほう、御病氣で御目に懸れぬ。それは残念ぢやが、致し方が無  
い。誠に申しかねましたが、一寸料紙と筆とを拜借願ひたい。」

信濃では月と佛とおらが蕎麥

其の儘暇を告げて、すた／＼と御厩橋の方へ歩いた。

「若し其處へ御出でのお方、一寸御待ちなされて下さい。」

「呼ばれたのは、私の事かろう。」

「へい、貴方が信州のお客様でしたな。」

「信州の乞食坊主ぢやが、してお前様は。」

「井筒屋の者でございます。只今はとんだ失禮を致しました。」

朋輩の者が大變主人に叱られました。お残り下さいました  
句を主人に見せました所、お目に懸りたいと申しますから、ど  
うぞ今一度御立寄を御願ひ申したいので。

「は、それは却て痛み入りました。固よりお目に懸りたく  
て御訪ね申したのぢやから、幾度でも戻りませうとも。」

一茶は快く踵を返した。

成美は若い頃から脚を病んで、起居も自由を缺き、自ら不隨齋と  
號して居た。不具な一茶に對して同病相憐む心からでもあつ  
たらう、快く家に留めて、何時までも逗留することを勧めた。

「話は後でゆつくり出来る。先づ湯にでも入つて旅の疲を休  
めるが宜しからう。」

「それは何より有難い。湯といふものには最早幾月對面せぬ



か解りませぬはい。」

「あゝ、旅の垢を落して、久しぶりに好い心持でござりました。」  
といひながら、座敷へ戻つた一茶の顔を見ると、青や赤や色々の  
斑が、隈取の様に染みついて居るので、成美は思はず噴きだした。  
「はゝゝ、どうなされた。」

「はて、何が其の様にをかしうござります。」

と、何も知らずに平氣であるのが益をかしい。

「何がではありませんよ、まあ一度鏡を見なさるが好い。」

「鏡などといふ物は、ついぞ見た事もござりませんが、一體どう  
したといふので。」

「いや、どうもかうも無い。湯にはひつて何をして御出でなさ  
れたか。そればかりではない。両手にまで其の通りえたい

の知れぬ斑點をつけてゐられるではござらぬか。」

「や、これは大變。はゝゝゝ。湯から上つて軀を拭くのに、つい  
手拭を忘れて出たので、取りに入るのも面倒と、袂に在つた風  
呂敷で間に合はせたが、さては此の色が移つたのでござらう。」  
と、平氣で取出して見せた。それはかなり汚れた更紗の風呂敷  
であつた。一茶にこんな無頓着は珍しい事ではなかつた。

最眞目に見てさへ寒き素振かな

めでたさも中位なりおらが春

露散るや各、明日は御用心

瘦蛙負けるな一茶こゝに在り

罷出でたるは此の藪の墓にて候



文政二年  
仁孝天皇の御代  
(二四七)

等は何れも人口に膾炙し、又よく一茶の人と爲りを現してゐる。

文政二年の冬十月十六日から一茶は中風に罹つたので、再び遊歴の望を絶ち、餘命幾何もない事を感じて、壽命決定の辭を作り、

兎も角もあなた任せの年の暮

とよんだのは師走二十九日、五十七歳の暮であつた。併し壽命はまだ残つて、復新しい春を迎へた。そこで、元日に、

今年から丸儲けぞよ娑婆の空

とよんだ。以來蘇生坊と稱してゐた。

文政十年霜月、病氣の上に老衰が加つて、十九日遂に臨終と見え、門人が、何ぞ辭世でもありませんか。といふと、一茶はかすかに口を動かして、

明専寺

長野縣上水内郡  
柏原村にある寺

盃から盃に移るちんぷんかん  
といつた。そして木の葉と共に散つた。享年六十五。火葬にして明専寺に葬つた。

其の後門人が記念に建てた「松陰に寝て喰ふ六十餘州かな」の句碑は、今も遺つて居るのである。(名人崎人)

正岡子規

名は常規

俳人

歌人

伊豫國松山生

明治三十五年歿  
年三十六

### 九花 芒

正岡子規

われ浮世の旅の首途かどしてよりこゝに二十五年、南海の故郷をさまよひ出でしよりこゝに十年、東都の假住居を見すてしよりここに十日、身は今旅の旅に在りながら、風雲の思なほ已み難く、頻に道祖神にさわがされて、霖雨の晴間をうかゞひ、草鞋よ脚絆よと身をつくろひつゝ、一箇の袱紗包を浮世のかたみに擔うて、飄



大磯  
神奈川県中郡大磯町

國府津  
同足柄下郡國府津町  
小田原  
同縣同郡小田原町

湯本  
同縣同郡湯本村  
箱根山の北麓

然と大磯の客舎を出てたる後は、天下は股の下、杖一本が命なり。  
旅の旅その又旅の秋の風



旅装の女子規

國府津・小田原は一生懸命にかけぬけて、はや箱根路へかゝれば、何となく行脚の心の中嬉しく、秋の短き日は全く暮れながら、谷川の音耳を洗うて、煙霧模糊の間に白

露光あり。

白露の中にほつかり夜の山

湯本に辿り着けば、一人のをのこ袖を控へて、いざ給へ、好き宿ま

みらせん。といふ。引かるゝまゝに行けば、いとむさくるしき家なり。前日來の病もまだ全くは癒えぬに、此の旅亭に一夜の寒氣を受けんことは氣遣はしく、やゝ落膽したるが、まゝよ、これこそ風流のはじめ、行脚の眞面目なれ。

だまされてゐる宿とる夜寒かな

つぎの日まだき起出でつ。一天晴渡りて、瀧の水朝日にきらつくに、鶺鴒の小岩づたひに飛びありくは逃ぐるにやあらん、はた此方へとするべするにやあらんと、草鞋の運び自ら軽らかに、箱根街道のぼり行けば、鶺鴒の聲左右にかしまし。

我がなりを見かけて鶺鴒の鳴くらしき

色鳥の聲をそろへて渡るげな

秋の雲瀧をはなれて山の上



病み疲れたる身の、一足のぼりては一息ほつとつき、一坂のぼりては巖端に尻をやすむ。駕籠舁の頻に駕籠をすゝむるを耳にもかけずのぼり行けば、

山路の菊野菊ともまたちがひけり

どつさりとし山駕籠おろす野菊かな

石原に瘦せて倒るゝ野菊かな

などおのづから口に浮みて、はや雙子山鼻先に近し。谷に臨めるかたばかりの茶屋に腰掛くれば、秋に枯れたる婆様の挨拶、何となくものさびびて面白くおぼゆ。「名物ありや」と問へば、力餅といふものあり」とて、大きな餅の焼きたる二つ三つ、盆に盛りて来る。

山姥の力餅賣る薄かな

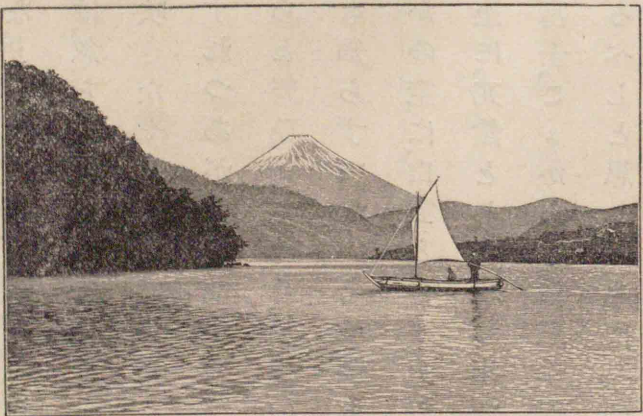
雙子山

箱根中央火山の  
東南端に聳えて  
ある雙峯  
標高千三百米

元箱根  
箱根山の頂上に  
ある村

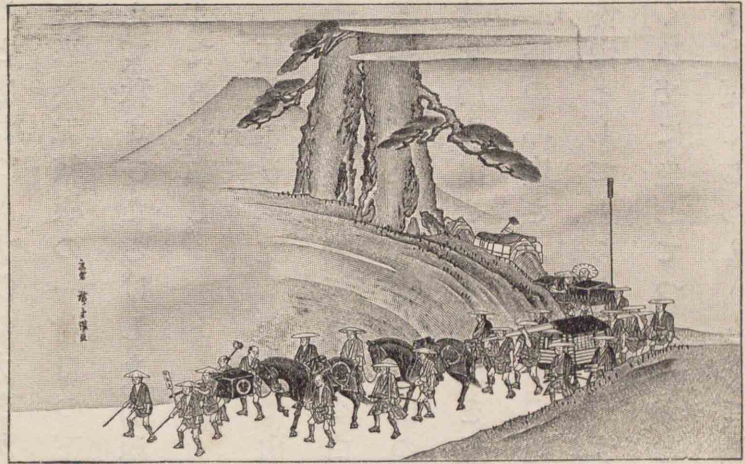
など戯れつゝ、力餅の力をかりて上ること一里餘、杉、樅の大木道を夾み、元箱根の一村目の下に見えて、秋さびびたるけしき、仙源に入りたるが如し。

紅葉する木立もなしに山深し千里の山嶺を攀ぢ、幾片の白雲を踏碎きて上り着きたる山の頂に、鏡を磨き出せる蘆の湖を見そめし時の心廣さよ。餘りの絶景に恍惚として立ちもえ去らず、木のかげに坐してつくづくと見れば、山更にしんくとして、風吹かねども冷氣冬の如く足もとよ



湖の蘆





箱根安藤街道大名家道中

りのぼり、腦天にしみ渡るこゝ  
 ちなり。波の上に飛びかふ鶴  
 鴿は、忽ち來り忽ち去る。秋風  
 に吹きなやまされて、力なく水  
 にすれつあがりつ胡蝶のひら  
 ひらと舞ひいでたる、箱根の頂  
 とも知らずてや、いと心強し。  
 遙かの空に、白雲とのみ見つる  
 が上に、兀然として現れ出でた  
 る富士、こゝからも猶三千仞は  
 あるべしと思ふに、更に其の影  
 を幾許の深さに沈めてさゝ波

に縮みよせられたる、またなくをかし。これより山を下るに、見  
 渡すかぎり皆薄なり。

箱根の關はいづちなりけんと思ふものから、問ふに人なく、探る  
 に跡なし。これらや歌人の歌枕なるべきとて、

關守のまねくやそれと來て見れば尾花が末に風わたる  
 なり

薄の句を得たり。

大方はすゝきなりけり山の上  
 伊豆相模境もわかず花すゝき

明治維新前までは、金紋先箱の行列整々として、鳥毛片鎌など威  
 勢よく振立て、行きかひし街道の繁昌も、あはれものの本に  
 のみ残りて、草刈るわらべの小路一筋を除きて外は、草の生ひ出



てぬ處もなく、僅かに行列のおもかげを薄の穂にとゞめたり。  
槍立てて通る人なし花芒  
(子規全集)

### 一〇 浮島が原

九郎御曹司浮島が原に着き給ひ、兵衛佐殿の陣の前、三町ばかり引退いて陣を取り、しばらく息をぞ休められける。佐殿これを見御覽じて、こゝに白旗・白印にて清げなる武者五六十騎ばかり見えたるは、誰なるらん、覺束なし。信濃の人々は木曾に從ひて留りぬ。甲斐の殿ばらは二陣なり。いかなる人ぞ。假名・實名を尋ねて參れ。とて、堀彌太郎を御使にて遣はされ、家子・郎等數多引具して參る。間を隔てて彌太郎一騎進み出で申しけるは、こゝに白印にておはしまし候は、誰人にて渡らせ候ぞ。『假名・實名を

浮島が原  
静岡縣駿河國愛  
鷹山の南麓なる  
浮島沼附近の原  
沼津市の西の原  
驛附近  
九郎御曹司  
源九郎義經  
兵衛佐  
前左兵衛權佐源  
頼朝  
木曾  
木曾冠者源義仲  
甲斐の殿ばら  
武田信義その子  
信光など

裾濃  
鎧のをどしの色  
の上は白く下に  
なるほど色を濃  
くぼかしたも  
五枚兜  
しころの五枚に  
なつてゐる兜  
鍬形  
兜の庇の上に立  
つてゐる角のや  
うなもの  
大申黒の矢  
蓋の羽の上下は  
白く中ほどの黒  
い部分の廣いの  
で作つた矢

慥かに承り候へ。』と鎌倉殿の仰にて候。と申しければ、其の中に二十四五ばかりなる男の、色白く尋常なるが、赤地の錦の直垂に、紫裾濃の鎧の、裾金物うちたるを着、白星の五枚兜に鍬形うちて、猪頸に着大申黒の矢負ひ、滋籐の弓持ちて、黒き馬の太く逞しきに乗らるが、歩ませ出でて申されけるは、鎌倉殿もしろしめされて候。童名は牛若と申し候ひしが、近年奥州に下向仕り候うて居候ひつるが、御謀叛のよし承り、夜を日に繼ぎて馳參じて候。



源 藤原 隆 信 朝 筆



佐藤三郎  
名は嗣信

同四郎  
佐藤四郎忠信  
伊勢三郎  
名は義盛

見參に入れてたび候へ。と仰せられければ、堀彌太郎、さては御兄弟にてまし、けりと、馬より飛んで下り、御曹司の乳母子佐藤三郎をよび出して、色代あり。彌太郎、一町ばかり馬を牽かせけり。かくて佐殿の御前に參り、此の由を申し上げければ、佐殿は善惡に騒がぬ人にておはしけるが、今度は殊の外嬉しげにて、さらば、是へおはしまし候へ。見參せん。とのたまへば、彌太郎やがて參り、御曹司に、此の由を申す。御曹司、大きに悦び、急ぎ參り給ふ。佐藤三郎同四郎、伊勢三郎、これら三騎召連れて參らる。佐殿御陣と申すは、大幕百八十張ひきたりければ、その内は、八箇國の大名、小名並みゐたり、各、敷皮にてぞありける。佐殿御座敷には、疊一疊敷きたれども、佐殿も敷皮にぞおはしける。御曹司兜を脱ぎて童に持たせ、弓取直し、幕のきはに畏まりてぞおはし

頭の殿  
左馬頭源義朝  
池の尼  
平忠盛の後妻  
清盛の繼母  
伊豆の配所  
田方郡蛭が島  
韭山の近く  
伊東  
伊東祐親  
北條  
北條時政

ける。その時、佐殿敷皮を去り、我が身は疊にぞ直られける。それへそれへ。とぞ仰せらる。暫く辭退して敷皮にぞなほられける。

佐殿は御曹司をつくぐと御覽じて、先づ涙にぞ咽ばれける。御曹司もそのいろは知らねども、共に涙に咽び給ふ。互に心のゆく程泣きて後、佐殿涙を仰へて、さても頭の殿に後れ奉りて、その後、御行方を承り候はず。幼少におはし候時、見奉りしばかりなり。頼朝、池の尼の宥められしによりて、伊豆の配所にて伊東北條に守護せられ、心にまかせぬ身にて候



源義經  
陸中平泉中尊寺藏



ひしほどに、奥州へ御下向のよしは、かすかに承りて候ひしかども、音信だにも申さず候。兄弟ありと思召し忘れ候はて、取敢へず御上り候こと、申し盡しがたく悦び入り候。これ御覽候へ。かゝる大事をこそ思ひ企てて候へ。八箇國の人々を初めとして候へども、皆他人なれば、身の一大事を申し合する人もなし、みな平家に相従ひたる人々なれば、頼朝が弱げをまぼりたまふらんと思へば、夜も夜もすがら平家の事のみ思ひ、また或時は、平家の討手上せばやと思へども、身はひとりなり、頼朝自身進み候へば、東國おぼつかなし、代官を上せんとすれば、心安き兄弟もなし、他人を上せんとすれば、平家と一つになりて、却て東國をや攻めんと存ずる間、それも叶ひ難く、今御邊を待ちつけて候へば、故左馬頭殿よみがへられたまひたるやうにこそ思ひ候へ。我等が

八幡殿

八幡太郎源義家

栗屋川

今厨川と書く  
盛岡市の西郊

刑部丞

新羅三郎源義光

祖先八幡殿の後三年の合戦に、むなうの城を攻められしに、多勢皆滅されて無勢になりて、栗屋川のはたにおし下りて、幣帛を捧げて王城を伏拜み、南無八幡大菩薩、御擁護をあらためず、今度の壽命を助けて本意を遂げさせてたべ」と祈誓せられければ、まことに八幡大菩薩の感應にやありけん、都におはする御弟刑部丞は内裏に候ひけるが、俄かに内裏を紛れ出で、奥州の覺束なきとて、二百餘騎にて下られける路次にて勢打ちくは、り、三千餘騎にて栗屋川に馳來て、八幡殿と一つになりて、つひに奥州を従へたまひける、その時の御心も、頼朝御邊を待ちえ參らせたる心に、いかでかまさるべき。今日より後は魚と水との如くにして、先祖の恥を雪ぎ、亡魂の憤を休めん」と宣ひもあへず涙を流したまひけり。御曹司は、とかくの返事なくして、袂をぞ絞られける。

魚と水との如く  
孤之有<sup>ハ</sup>孔<sup>ハ</sup>明<sup>ニ</sup>、  
猶<sup>ハ</sup>魚<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>有<sup>ニ</sup>水<sup>ニ</sup>。  
(劉志)



これを見て大名小名互の心の中推量られて、みな袖をぞ濡されける。

しばらくありて、御曹司申されけるは、おほせのごとく、幼少の時

御目に懸りて候ひける

やらん。配所へ御下り

の後は、義經も山科に候

ひしが、七歳の時鞍馬へ

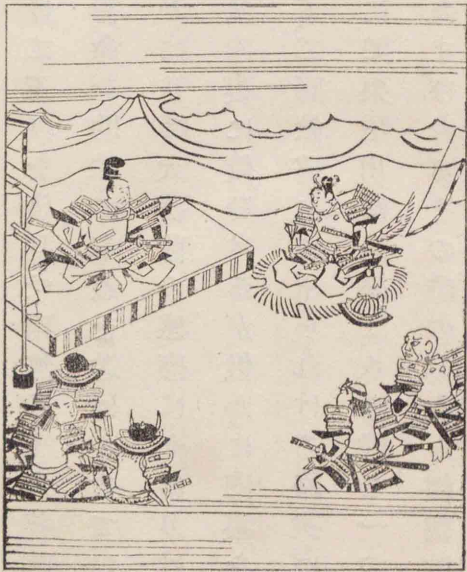
まゐり、十六まで形の如

く學問を仕り、さては京

都に候ひしが、内々平家

方便を作るよし承り候間、奥州に下向仕りて秀衡を頼み候ひつ

るが、御謀叛のよし承りて取敢へず馳せまゐる。今は君を見奉



頼朝と義經の對面記

山科  
今の京都市東山  
區山科  
鞍馬  
京都の北方の山  
里

秀衡  
陸奥出羽の押領  
使鎮守府將軍藤  
原秀衡

り候へば、故頭の殿の御見參に入り候心地してこそ候へ。命をば故頭の殿にまゐらせ候。身をば君にまゐらす上は、いかか仰に従ひまゐらせては候べき」と申しも敢へず、涙を流したまひけるこそあはれなれ。さてこそ、この御曹司を大將軍にて上せたまひけれ。(義經記)

### 一一 佐藤嗣信

中にも後藤兵衛實基は古兵ふるつばものにてありければ、磯の軍をばせず、先づ内裏へ亂れ入り、手々に火を放つて、片時の煙と焼き拂ふ。大臣殿侍どもに、源氏が勢は如何程あるぞ」と問ひたまへば、七八十騎にはよも過ぎ給はじ。「あな心憂や、髪かみの筋を一筋づつ分けて取るとも、この勢には足るまじかりつるものを、中にも取籠めて

内裏  
屋島の行宮  
本文は壽永四年  
(二八四年)二月十八  
日讃岐屋島の合  
戦の時の事であ  
る  
大臣殿  
内大臣平宗盛



能登  
能登守平教經

清和天皇
貞純親王
源經基
滿仲 頼信
頼義 義家
爲義 義朝
頼朝
義經

討たずして、あわてて船に乗つて、内裏を焼かせぬることこそ口惜しけれ。能登殿はおはせぬか。陸に上つて一軍し給へかし。」と宣へば、「承り候。」とて、越中次郎兵衛盛嗣を先として、都合五百餘人、小船に乗り、焼き拂つたる總門の前の汀に押寄せて、陣を取る。判官も八十餘騎矢比に寄せて控へたり。

平家の方より越中次郎兵衛船の屋形に進み出で、大音聲をあげて、抑以前名乗り給ひつるとは聞きつれども、海上遙かに隔つて、その假名なまな、實名まこと分明ならず。今日の源氏の大將軍は誰人にてましますぞ。名乗り給へ。」といひければ、伊勢三郎進み出でて、「あな、事もおろかや。清和天皇十代の後胤、鎌倉殿の御弟、大夫判官殿ぞかし。」盛嗣聞いて、「さる事あり。去んぬる平治の合戦に、父討たれて孤みだりにてありしが、鞍馬のちごして、後には金商人かねあきんどの所従と

礪波山

一名栗殼嶽  
・富山縣越中國礪波郡の西端加賀との境に峙つ山

鈴鹿山

伊勢と近江との境に峙つ山  
山だち

金子十郎  
名は家忠

なり、粮料背負うて奥の方へ落ち下りし、その小冠者めがことかとぞいひける。義盛歩ませ寄つて、舌の柔かなるまゝに、君の御事を申しそ。さいふわ人どもこそ、北國礪波山の軍に打負け、辛き命生きつゝ、北陸道にさまよひ、乞食して上つたりし、その人かとぞいひける。盛嗣重ねて、君の御恩に飽き充ちて、何の不足あつてか乞食をばすべき。さいふわ人どもこそ、伊勢國鈴鹿山にて山だちし、妻子をもはぐくみ、わが身も所従も過ぎけるとは聞きしか。」といひければ、金子十郎進み出でて、詮ない殿原の雑言かな。われも人もそら言ひつげ、雑言せんに、誰かは劣るべき。去年の春攝津國一谷にて、武藏相模の若殿原の手並の程をば見てんものを。」といふ處に、弟の與一側にありけるが、言はせも果てず、十二束三伏取つてつがひ、よつ引いてひようと放つ。次郎兵



唐卷染  
綾り染  
唐は美稱

たかうすべうの  
矢  
鶯の尾羽の中黒  
の斑のあるので  
作つた矢



佐藤嗣信の最期

衛が鎧の胸板に、うらかく  
ほどにぞ立つたりける。  
さてこそ互の詞戦は止み  
にけれ。  
能登殿、船軍はやうあるも  
のぞ。とて、鎧直垂をば着た  
まはず、唐卷染の小袖に唐  
綾絨の鎧着て、いかものづ  
くりの太刀を佩き、二十四  
差いたるたかうすべうの  
矢負ひ、滋藤の弓を持ちた  
まへり。王城一の強弓精

兵なりければ、能登殿の矢先にまはるもの、一人も射落されずと  
いふことなし。

中にも源氏の大將九郎義經を、只一矢に射落さんと狙はれけれ  
ども、源氏の方にて心得て、伊勢三郎義盛、奥州の佐藤三郎兵衛  
嗣信、同じき四郎兵衛忠信、江田源三、熊井太郎、武藏坊辨慶などい  
ふ一人當千の兵ども、馬の頭を一面に並べて、大將軍の矢表に馳  
せ塞がりければ、能登殿も力及び給はず。能登殿、そのき候へ、  
矢表の雜人原。とて、さしつめ引きつめ散々に射給へば、矢庭に鎧  
武者十騎ばかり射落さる。

中にも眞先に進んだる奥州の佐藤三郎兵衛嗣信は、弓手の肩よ  
り馬手の脇へ、つと射抜かれて、暫しもたまらず馬よりさかさま  
にどうと落つ。能登殿の童に菊王丸といふ大力の剛の者、萌黄



三枚兜  
鍔の三枚ある兜

犬居  
犬が蹲つた様に  
手をつくこと



緘の腹巻に、三枚兜の緒をしめ、打物の鞆をはづいて、嗣信が首を取らんと飛んでかゝるを、忠信側にありけるが、兄が首を取らせじと、よつ引いてひようと放つ。菊王丸が草摺のはづれをあなたへつと射ぬかれて、犬居に倒れぬ。能登殿これを見給ひて、左の手には弓を持ちながら、右の手にて菊王丸をつかんで、船へかかりと投げ入れたまふ。敵に首を取られねども、痛手なれば死ににけり。

この童と申すは、もとは越前、三位通盛卿の童なり。然るを三位討たれたまひて後、弟能登殿にぞ使はれける。生年十八歳とぞ聞えし。能登殿この童を討たせて、餘りにあはれに思はれければ、その後は戦をもしたまはず。

判官は嗣信を陣の後へかき入れさせ、急ぎ馬より飛んで下り、手

を取つて、如何覺ゆる、三郎兵衛と宣へば、今はかうにこそ候へ。

「この世に思ひ置く事はなきか」と宣へば、別に何事をか思ひ置くべき。さは候へども、君の御世にわたらせ給ふを見參らせずして死に候こそ心にかゝり候へ。さ候はでは、弓矢取は敵の矢に當つて死ぬること、もとより期する所でこそ候へ。就中源平の御合戦に、奥州の佐藤三郎兵衛嗣信といひけん者、讃岐、國屋島の磯にて、主の御命に代つて討たれたりなど、末代までの物語に申されんこそ、今生の面目、冥土の思出にて候へ。とて、只弱りにぞ弱りける。

判官は猛き武士なれども、餘りに哀に思ひ給ひて、鎧の袖を顔に押當てて、さめくとぞ泣かれける。若しこの邊に尊き僧やある。とて尋ね出でさせ、手負の、只今死に候に、一日經書いて弔ひ給



五位尉  
壽永四年九月檢  
非違使判官義經  
は從五位下に敘  
せられた

へ。とて、黒き馬の太う逞しきに好い鞍置いて、かの僧にぞ賜びにける。この馬は判官五位尉になられし時、是をも五位になして大夫たいふ黒と呼ばれし馬なり。一、谷のうしろ鴨越をもこの馬にて落されける。弟忠信を始めとしてこれを見る侍ども、皆涙を流して、この君の御爲に命を失はんことは全く露塵程も惜しからず。とぞ申しける。〔平家物語〕

姊崎嘲風

名は正治  
宗教學者  
文學博士  
東京帝國大學教  
授  
明治六年京都生  
友  
高山樗牛

二三 忘れ難き日

姊崎嘲風

嗚呼、忘れ難き此の日かな。思へばはや五年の昔、春光麗かに南風薫ずる日、友に擁せられて家を辭し、故國に別れしは恰も今日の此の日なりき。帽を振れる客、巾を翻せる友、船上艇中相隔りては面も定かならず、姿も終には見分かぬ迄に消え失せぬ。健

清見潟  
静岡縣庵原郡興  
津町の海

三月  
明治三十三年

在なれ。再び早く相見ん。との別れの言葉は尙耳に響き、最後の握手今尙掌に感ぜられつゝも、見渡せば白鷗飛びかふ海の面渺として、埠頭の家屋、故國の山河、已に霞の中に入りなき。嗚呼、かくて相別れたる我が友、今何處にかある。彼はその夜、西の方足柄を過ぎて清見潟のほとりにさすらひ來り、恰も此の海樓に宿りて離別の悶を遣りしなり。月は去り日は逝きて五年後の今日、此の日、我は來りて此の海樓にあれど、彼は既に世を謝して復相見んに由なく、我をして孤影蕭然欄に憑りて無限の感に沈ましむ。

三月君が西航の首途を横濱に送りたる日、予は西の方函嶺を踰えて駿州に入り、清見潟の海樓に宿りて離別の悶を遣りたりき。其の夜月明かに星稀に、一灣の風光恍として夢の如し。



有渡の山

靜岡縣安倍郡久

能山の別稱

袖師の松原

三保松原の對岸

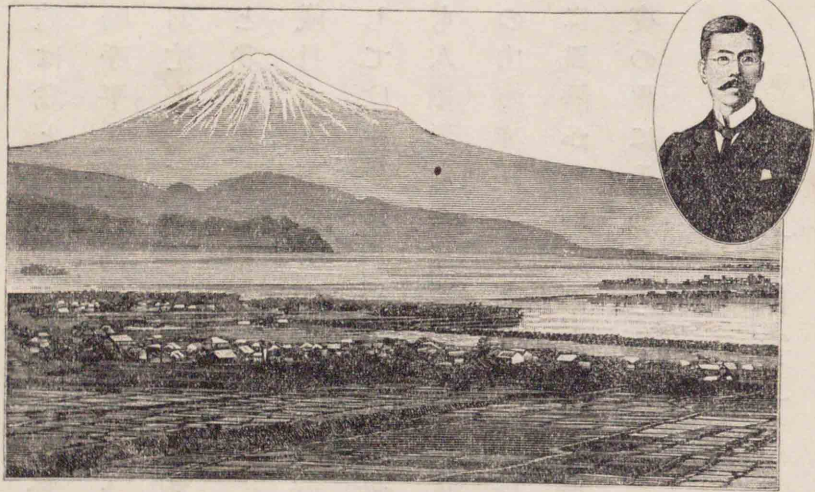
埋骨の地

靜岡縣安倍郡不

二見村龍華寺

中宵欄に憑りて靜かに君を思ひ、うたゝ人生遭逢のはかなきを歎きぬ。

人生遭逢のいとはかなきを歎じたる彼、今や我を此の世に残し、獨り我をして離合の泡沫に似たるを歎かしむ。見渡せば有渡の山、影かすかにして、袖師の松原、雨におほろなり。彼が埋骨の地、彼が夢遊の山川、すべて暗澹の中に包まれて、海面亦死せるが如し。此の海、此の地、是、彼が久戀懷慕の處なりき。此の夜、此の風光、是、彼が銷魂の種たりしこと幾度ぞ。山海舊の如く、風光昔の儘にして、彼が友は已に歸り來つれど、彼と其の姿とは今や尋ぬるに由なし。昨は彼が墓邊の櫻花散りかゝる寒水石の碑を撫て、今夜、五年前の今日の別離を偲んで、彼が遺文に對す。嗚呼、我此の流轉の世に處し、此の友なくして如何にしてか憂懷を



龍華寺か見た富士山

遣らん。

されど徒らに憂ふるを已めよ。人に百歳の齡なく、世に別離なき人はあらじ。生死は世の常なり。別離は却て懷慕の樂みを深からしめ、懷慕は時と處との隔を越えて神相接せしむ。友こゝにあり、悠久の夜亦こゝにあり。彼が遺文餘薰新にして、我が思慕日毎に彼に通ず。清見灣頭、今宵雨しめやかにして夜靜かなり。形は見えねど、



嗚呼云々  
樗牛が嘲風に送  
つた文の一句

友  
京都帝國大學教  
授文學博士藤井  
健治郎  
高山樗牛  
名は林次郎  
評論家  
文學博士  
羽前國鶴岡生  
明治三十五年歿  
年三十二

彼は我と語り、我は彼に接し、松風濤聲亦時に款晤に入り來る。  
「嗚呼平生憂を同じうせる君と予と、先世何の契縁かある。」身世  
匆忙として相移り、際遇已に相異なり、生死幽明相隔つと雖も、彼  
と我と長へに相伴なはん。

歲月水と流れ去つて五年の昔を今に返す由なけれども、神相接  
しては生死路相隔てず。三世一心の中に融け來つては、彼も我  
も人相異ならず、靈相同じ。人里には燈火已に影を收め、清見瀉  
の山海亦眠らんとす。雨よ降れ、夜よ暗かれ、有渡山下、友の墓邊  
に風靜かなれ。而して我は此處に我が友と相語りつゝ、今宵一  
夜の眠に入らん。(停雲集)

一三 友に寄す

高山樗牛

如何清暮しなされ候や此方相愛らす  
碌々羅在の閑餘事ながら清安心下され  
たく候此頃は事に紛れ御無沙汰に  
打過ぎ候毎度勝手の手のみ清頼み  
申上げの面倒察入候徒然の折には  
物ほきまき色々注文申上候へども實  
際手にとるは稀に清座候水彩畫にても  
描きみんとて吃頃繪具など取寄せ候



ても是また手に觸れず候顧みれば我な  
 がら候くも暮しつるものかなと思はれ候  
 へどもその日はなかくに樂しく過し  
 申候

魚見崎  
 熱海町の南端に  
 ある岬  
 眞鶴崎  
 神奈川縣足柄下  
 郡にある岬  
 熱海の東北十三  
 軒

小生の室は熱海中にて最も眺望よき處  
 にて魚見崎より眞鶴崎まで雙眸の裏  
 に萃り候朝日影さし入る頃に起き出でて  
 九時頃より濱邊など散步致し午後は

ハイネ  
 Heine  
 (1797—1856)  
 獨逸の詩人

圍碁大弓等に費すが毎日の例に候時に  
 は一卷のハイネ集を携へて山腹の芝原  
 に仰臥し大海の浩蕩に對して朗吟する  
 ことも御座候或は日暮の空ひとり磯邊の  
 松に腰打懸けて夢ともなく現ともなき思  
 に耽ることもあれあり候げにや自然の無盡  
 藏なる今はた驚かるばかりに清座候  
 我も人も自然こと口には言へ幾人か



其の真意を會得したるや、天の響地の  
 響思ひ見るだに高く深く徹ともその感ず  
 る人の心は如何ばかり高く深きものに候  
 べきやうく夕日影も名残なく暮れ果て、  
 渾火ほの見ゆる頃に相成候へばざんざくの  
 波音のみ高く相成り水と空との別も消えて  
 天地も一つになりたらんと思はるゝころ夜  
 は眠のために造られたるものにあらずとの

笹川 笹川臨風  
 姉崎 姉崎正治  
 大橋 大橋乙羽  
 熊谷 熊谷五郎

詩人の言葉の今更に思ひ出でられ候  
 去年の暮より二三日前までは月色殊の外  
 めでたくあかず夜をふかして打眺め申候  
 元日の夜は十七夜なりしゆゑ月の海を出  
 づる頃小生の宿に笹川姉崎大橋熊谷の  
 諸氏と共に觀月の小宴を張り申候ひき  
 一昨日の夜九時頃にても候ひけん牀に  
 就かんとはからず窓の間より海邊をな



がめ候へば缺月ながら一間ばかり海と離れ  
 言ふばかりなくめでたき景色にて候ひしか  
 ば下女に命じて雨戸をあけさせ欄に  
 よりてハイネを朗吟致候其時の心地よさ  
 あはれわれこのまゝ石にも金にもなれかしと  
 思はれ候ひき  
 貴兄等はさぞかし日々清勉學の事事なら  
 んと羨まれ申候時には清文賜ひ候へか

し病氣も大方は宜しく候間心配下さ  
 るまじく候申上げたき事山々これあ  
 り候へどもまづこれにて筆をとめ候

(穉牛全集)

西田幾多郎

哲學者

文學博士

京都帝國大學名

譽教授

明治元年加賀國

生

小田原

神奈川縣小田原

町

一四 愛兒の死

西田幾多郎

三十七年の夏、東圃君が家族を携へて歸郷された時、君には光子といふ女の兒があつた。愛らしい生々した子であつたが、昨年の夏、君が小田原の寓居の中に意外にも此の子を喪はれたので、余は前年旅順で戦死した余の弟のことなど思ひ浮べて、力を盡



して君を慰めた。然るに何ぞ圖らん、今年の一月、余は漸く六つばかりになつた己が次女を死なせて、却て君から慰められる身となつた。

今年の春は、十年餘も帝都を踏まなかつた余が、思ひがけなくも或用事の爲に東京に出るやうになつた。着くや否や東圃君の宅に投じた。君と余とは中學時代以來の親友である、殊に今度は同じ悲みを抱きながら、久しぶりで相見たのである、單にいつもの舊友に逢ふといふ心持のみではなかつた。然るに手紙では互に相慰め、慰められて居ながら、面と相向つては何の語も出ず、唯軽く弔辭を交換しただけであつた。逗留七日、積る話はそれからそれと盡きなかつたが、遂に一言も亡兒の事に及ばなかつた。唯余の出立の朝、君は篋底を探つて一束の草稿を持來つ

て、亡兒の終焉記だから、といつて余に示された、かつ今度出版すべき文學史をば亡兒の記念としたいとのこと、及び余にも何か書添へてくれよといふことをも話された。君と余と相遇うて亡兒の事を話さなかつたのは、互にその事を忘れて居たのではない、又堪へ難い悲哀を更に思ひ起して、苦悶を新にするに忍びなかつたのでもない。誠といふものは言語に表はし得べきものではない。言語に表はし得べきものは平凡である、淺薄である、虚偽である。至誠は相見て相言ふ能はざる所に存するのである。我等の相對して相言ふ能はざりし所に、言語はおろか、涙にも現すことのできない深い同情の流が心の底から底へと通つて居たのである。

余も我が子を亡くした時に深い悲哀の念に堪へなかつた。特



に此の悲みが年と共に消えゆくかと思へば、いかにも淺ましく、せめて後の思出にもと、死んだ子の面影を書残した、而して直ちに之を東圃君に送つて一言を求めた。當時眞に余の心を知つてくれる人は君の外にないと思つたのである。然るに何ぞ圖らん、君は余よりも前に、同じ境遇に會うて、同じ事を企てられたのである。余は別れに臨んで君の送られたその兒の終焉記を行李の底に收めて歸つた。一夜眠られぬまゝに取出して詳かに讀んだ。讀み終つて、人心の誠はかくまでも同じものか、とつくづく感じた。誰か人心には定法がないといふ、同じ盤上に、同じ球を、同じ方向に突けば、同一の行路を辿るやうに、余の心は君の心のやうに動いたのである。

回顧すれば、余の十四歳の頃であつた、余は幼時最も親しかつた

余の姉を喪つたことがある、余は其の時生來始めて死別のいかに悲しいかを知つた。余は亡姉を思ふの情に堪へず、また母の悲哀を見るに忍びず、人無き處に到つて思ふ儘に泣いた。幼心に、若し余が姉に代つて死に得るものならばと、心から思つたことを今も記憶してゐる。近くは三十七年の夏、悲惨な旅順の戦に、唯一人の弟は敵壘深く屍を委して、遺骨をも收め得なかつた有様、こゝに再び舊時の悲哀を繰返して、斷腸の思が未だ全く消しせないのに、又己が愛兒の一人を喪ふやうになつた。骨肉の情いづれ疎かなるはないが、特に親子の情は格別である。余は此の度生來未だ曾て知らなかつた沈痛な經驗を得たのである。余はこの心から推して、一々君の心を読むことが出来ると思ふ。君の亡くされたのは君の初子であつた、初子は親の愛を専らに



ドストエフスキ  
Dostoyevsky  
(1821-1881)  
小説家  
ロシアの小



—キスフエトスド

するが世の常である。特に幼い女の子はたまらぬ位に可愛いとのことである。情濃やかな君にして此の子を喪はれた時の感情はどんなであつたらう。亡き我が兒の可愛いといふのは何の理由もない、唯譯もなく可愛いのである。甘いものは甘い、辛いものは辛いといふの外にない。「これまでにして亡くしたのは惜しからう。」といつて、悔んでくれる人もある、併しかういふ意味で惜しいといふのではない。「女の子でよかつた。」とか、「外に子供もあるから。」などいつて慰めてくれる人もある、併しかういふことで慰められようもない。ドストエフスキが愛兒を喪つた時、子

ソニヤ  
Sonia

供はまた生れるだらう。」といつて慰めた人があつた。氏は之に答へて、「どうして他の兒が愛されよう。私にゐるのはソニヤだ。」といつたといふことがある。親の愛は實に純粹である、其の間一毫も利害得失の念を挟む餘地はない。唯亡兒の倂を思ひ出すにつれて、無限に懐かしく可愛さうで、どうにかして生きてゐてくれ、ばよかつたと思ふのみである。若いものも、老いたものも、死ぬのは人生の常である、死んだのは我が子ばかりでないと思へば、理に於ては少しも悲しむべき所はない。併し人生の常事であつても、悲しいことは悲しい。飢渴は人間の自然であつても、飢渴は飢渴である。人は、死んだ者はいかに言つても還らぬから、諦めよ、忘れよ、といふ。併し、これが親に取つては堪へない苦痛である。時はすべての傷を癒すといふのは自然の恵



ワシントン、ア  
ーヴィング

Washington Irving  
(1813-1895)  
アメリカ合  
衆國の文學  
者

スケッチブック

Sketch book  
アーヴィング  
の短篇集

死にし子云々  
をんな子のため  
には云々  
共に紀貫之の  
「土佐日記」に見  
えてゐる

であつて、一方より見れば大切なことかも知らぬが、一方より見れば人間の不人情である。何とかして忘れたくない、何か記念を残してやりたい、せめて我が一生だけは思ひ出してやりたいといふのが親の誠である。昔、君と机を並べてワシントン、アーヴィングのスケッチブックを讀んだ時、他の心の疵や苦みは、之を忘れ、之を癒したいとおもふが、獨り死別といふ心の疵は、人目をさけても之を温め、之を抱きたいと思ふ。といふやうな語があつた。今まことに此の語が思ひ合されるのである。折にふれ物に感じて思ひ出すのが、せめてもの慰藉である。死者に對しての心づくしである。この悲は苦痛といへば誠に苦痛であらう、併し親は此の苦痛を去りたいと思はないのである。「死にし子顔よかりき。」をんな子のためには親をさなくなりぬ

カント

Immanuel Kant  
(1724-1804)  
獨逸の大哲  
學者

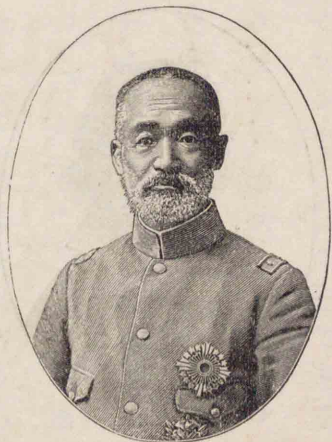
スピリット  
Spirit  
精神



べし。など、古人もいつたやうに、親の愛はまことに愚痴である。冷靜に外より見たならば、たわいない愚痴と思はれるであらう。併し余はこの人間の愚痴といふものの中に、人情の味ひのあることを今度悟つた。カントがい  
つたやうに、物には皆値段がある。獨り人間は値段以上である、目的其の者である。いかに貴重な物でも、それは唯人間の手段として貴いのである。世の中に人間ほど貴い者はない、物は之を償ふことが出来るが、いかにつまらぬ人間でも、一のスピリットは他の物を以て償ふことは出来ぬ。而してこの人間の絶對的價値といふことが、己が子を喪つたやう



ゲーテ  
Johan Wolfgang  
von Goethe  
(1749-1932)  
詩人 獨逸の大



乃 希 木 典

な場合に最も痛切に感ぜられるのである。ゲーテがその子を喪つた時、死者を越えてといつて仕事を續けたといふが、ゲーテにして此の語をなした心の中には、固より仰ぐべき偉大なものがあつたであらう。併し人間の仕事は、人情といふことを離れて外に目的があるのではない。學問も事業も、究竟の目的は人情の爲にするのである。而して人情といへば、縦ひ小なりとはいへ、親が子を思ふより痛切なものはない。徒らに高く構へて人情自然の美を忘れる者は、却てその性情の卑しいことを示すに過ぎない。「征馬不前人不語」金州城外立斜陽の句があつて、

愈、乃木將軍の人格が仰がれるのである。とにかく、余は今度我が子の果敢ない死といふことによつて、多大の教訓を得た。名利を思つて煩悶の絶間のない心の上に、一

筆蹟  
山川草木轉、荒涼、十里風腥新戰場。征馬不前人不語。金州城外立斜陽。  
石林子

山川草木轉荒涼  
十里風腥新戰場  
征馬不前人不語  
金州城外立斜陽

石林子

乃 木 希 典 筆 蹟

杓の冷水を浴びせかけられた様な心持がして、一種の涼味を感ずると共に、心の奥から秋の日の様な清く温い光が照して、すべての人の上に純潔な愛を感じることが出来た。特に深く我が心を動かしたのは、今まで愛らしく話したり、歌つたり、遊んだりしてゐた者が忽ち消えて壺中の白骨となるといふのは、如何なる譯であらうか。若し人生



土田杏村

名は茂

哲學者

評論家

明治二十四年新

潟縣佐渡郡生

曼荼羅

梵語

Mandala 圓輪具足の義

アッシマ

Assisi 伊太利の中部  
ペルギヤ州の  
小市街

はこれまでのものであるといふならば、人生ほどつまらぬものはない。此處には深い意味がなくてはならぬ。人間の靈的命はかくも無意義のものではない。死の問題を解決するといふのが人生の一大事である。死の事實の前には、生は泡沫の如くである。死の問題を解決し得て、始めて眞に生の意義を悟ることができる。(思索と體驗)

### 一五 雄辯

土田杏村

秋になつた。——林の木の葉に大空が高い。静かに舞落ちる紅葉には日の光が眠つてゐる。枝から枝へと飛遊ぶ小鳥の聲も、この頃は何といふ朗かさと落着きとを持つてゐることだらう。世界に韻がある、悦がある。一幅の曼荼羅圖だ。アッシマ



聖ラフス小鳥に説教す オットオテ作



聖フランシス

伊太利の高

St. Francis  
(1182-1226)  
僧 謙遜卑下を  
理想とし小  
鳥にも説教  
し蚯蚓にも  
祈を捧げた  
といふ

或雄辯家

大海の怒濤に向  
つて辯舌を練つ  
たといふギリシ  
ヤのデモステネ  
ス

の聖フランシスは小鳥に説教をしたといふが、この頃の林の中を歩くものは、誰でも小鳥に向つて物を語りたくなるであらう。舞落ちる木の葉、立續く林の樹々に向つても演説をしたくなるであらう。これほど落着いた演説が、世にあらうか。清純簡素にして、生命に充溢れ、語る人も聞く者も悦の眼をあげる。すべては融けあつてゐる、輝いてゐる、韻を呼びかはす。私はこゝにまことの演説を見たい。

私は昔北海の怒濤を前にして演説の稽古をした。それは泰西の或雄辯家がさういふ修行をしたと聞いたからである。又或時は、今のやうな秋の日の林の中で、落ちる日を眺めながら物を語る練習をした。今になつて回顧すれば、やはり夕日の林の印象の方が私には強く遺つてゐる。それは只の稽古だといふ氣



がしない。まことの演説の記憶として私には遺つてゐるのだ。流れ行く小川のせゝらぎも、木の葉の光も、それは何れかの演説會場の聴衆以上に、はつきりと私の眼に遺つてゐるのだ。演説によつて戦ふといふ氣持は、もはや昔のものになつた。昔のものにならなければならぬ。戦によつて勝つた者には、また戦によつて背かれる日が来る。群集心理を制して他を支配した者には、また群集心理によつて支配せられる日が来るであらう。戦ふ心は粗である。粗なる心は、まことの信仰を喚ぶことが出来ない。演説には精しい心が必要である。精しい心に發した、靜かな、清純な聲はまことに人の心に喚びかけよう。粗剛は質實とは違ふのである。粗剛はたゞ破る。心と心とを結ぶものではない。演説は人を縦横に縛り合はせるものであつて

はならぬ。心から心へ浸み透るものでなければならぬ。演説は所詮一つの表現であるから、その理解は出来るかぎり容易なものでなければならぬ。どれだけ眞摯な心に發した演説でも、表現せられなければ作品にはならぬ。理路を盡さなければならぬ。先づ自らを悦ばせる論理を持たなければならぬ。自らを表現の中に浸透せしめて、表現にまことあると同時に、自らを鑑賞者の地位に置いて、これを聴くものの理解に對して與へるすべての障礙を除去することに努めなければならぬ。演説は健全でなければならぬ、信頼し得る感じを持つものでなければならぬ。この點で、演説の構造はがつしりと科學的であり、散文の強みを持たなければならぬ。質實なる印象は自らその間に養はれる。質實は自然であり、粗剛は訓練せられない反



米松  
アメリカから輸  
入される松材

撥である。しかし同時に、演説は、詩の明るさ——朗かに透り、悦に  
 浸み入る明るさ——を持たなければならぬ。散文の明るさであ  
 つてはならぬ。米松の安建築のやうな明るさ、街頭の招牌に描  
 く圖案のやうな明るさであつてはならぬ。詩の明るさは直ち  
 に韻である、陰である。明るいだけで陰の無い演説は、表面の心  
 に快樂を興へるだけで、深く心を感動せしめることが出来ない。  
 明る過ぎてもしいけない、暗く鈍重であつてもいけない。演説は  
 常に一箇の藝術的作品でなければならぬ。そこには藝術品  
 について考へると殆ど同一の心置きが必要なのである。  
 演説は強みを持たなければならぬ。語つて人に感銘を遺す力  
 點を持たなければならぬ。諄々と語つて、残り無く人の理解を  
 得ると同時に、固く執つて動かぬものがなければならぬ。短い

要點は繰返されてもよい。又別の形式でこれを高調してもよ  
 い。理論の筋道を時々回顧して行くことも必要である。唯説  
 話の繰返は演説の内容を弛緩せしめる。徒らに長いものは却  
 て感銘が薄く、時には聴者の反感をさへ買ふ。強く主張すると  
 同時に、快く放つところも必要である。確實に建設する他方で、  
 楽しく想像することも必要である。要は自らを表現者の立場  
 に置くと共に、自らを聴者の立場に置く修練が必要なのである。  
 多くの人々の納得を得る演説は恐らく不可能なるものであら  
 う。すべての人に語つて、しかも一人の心よりなる同感者を得  
 るのがまことの演説であらう。敵を愛さなければならぬ。た  
 だ自己の同感者にのみ語る態度は、貴族的、非社會的であつて、狭  
 く見える。またすべての人に同感を得ようと迫る態度は、迎合



的に危険を持ち、また結局すべての人の心を寂しくさせるであらう。聴者に反感を持つてはならぬ。たゞの一人の理解者をも持たない演説はあり得ないと考へて、自らの平安を得なければならぬ。誇りに教へてはならぬ。たゞ沈毅と平安とである。自らの地位を聴衆と同一のところに置くのである。社會の一員として悦ばしい義務を果すのである。所謂雄辯がその効果に於て雄辯になつてゐない場合は少なく無い。聴衆がたゞその雄辯をだけ感嘆し、その演説の内容を忘却して歸る演説は少なく無いものである。それはまことの雄辯とはいはれない。演説は一時を支配するものではない。永遠に心の結合を求めるものだ。その演説の主張する要點を印象に遺して歸る演説は、先づ取るべき演説であらう。主張の理

路と共に、その主張者の人としての靜かな感銘を長く心に遺す演説こそは、まことに雄辯といふ言葉の適當する演説であらう。技巧や身振が聴者の心に遺つてはならぬ。雄辯であつたことの印象が聴者の心に遺つてはならぬ。雄辯と知られないで、まことに聴者を打つ演説こそは眞の意味の雄辯である。所詮演説は、客觀的であり、理論的であると同時に、彼自身の表現でなければならぬ。彼自身のものでなければならぬ。彼自身でなければならぬ。演者と聴者との別を忘れしめるものでなければならぬ。何等の支配無く、説破無く、雄辯も亦消えて跡無きものでなければならぬ。まことの雄辯は所謂雄辯と反對の極に向つてゐる。私は秋の林を歩いて、到る處にまことの雄辯を聴いた。それは



源博雅

琵琶の名手

天元三年(六四〇)

墓

年六十二

延喜

第六十代醍醐天皇

克明親王

延長五年(天七)

墓

村上

第六十二代村上

天皇

逢坂の關

滋賀縣大津市の

南方逢坂山にあ

つた關所

敦實

宇多天皇の第八

皇子

宇多源氏の祖

康保四年(六七)

墓

御年七十

宇多法皇

第五十九代

小鳥の囀である、聲なく落ちる木の葉の光である。せゝらぎの水、その音の靜かに絶える處は却て雄辯だ。おゝ大落日の雄渾なる姿よ、私はその雄辯に自らの魂を淨化せしめる。(章烟心鏡)

### 一六 流泉啄木

今は昔、源博雅の朝臣といふ人ありけり。延喜の御子の兵部卿克明親王と申す人の子なり。萬づの事やむごとなかりける中にも、管絃の道になむいみじかりける。琵琶をも微妙に弾きけり。笛をもえもいはず吹きけり。この人、村上の御時に四位の殿上人にてありけり。その時に、逢坂の關に一人の盲庵を作りて住みけり。名をば蟬丸とぞいひける。これは敦實と申しける式部卿の宮の雜色にてなむありける。その宮は宇多法皇の

御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年ごろ琵琶を弾き給ひけるを常に聽きて、蟬丸、琵琶をなむ微妙に弾く。

然る間、この博雅この道を強ちに好みて求めけるに、かの逢坂の關の盲、琵琶の上手なる由を聞きて、彼の琵琶を極めて聽かまほしく思ひけれども、盲の家異様なれば行かずして、人を以て内々に蟬丸にいはせけるやう、など思ひがけぬ處には住むぞ。京に來ても住めかし。と。盲これを聞きて、その答をばせずして曰く、世の中はとてまかくても過してむ

宮もわらやもはてしなれば

と。使歸つてこの由を語りければ、博雅これを聞きて、いみじく心にくゝ覺えて、心に思ふやう、我強ちにこの道を好むによりて、必ずこの盲に會はむと思ふ心深し。それに、盲命あらむことも



測り難し。又我も命を知らず。琵琶に流泉啄木といふ曲あり。これは世に絶えぬべきことなり。唯この盲のみこそこれを知りたるなれ。構へてこれが弾くを聞かむ。」と思ひて、夜かの逢坂の關に行きにけり。されども蟬丸その曲を弾くことなかりければ、その後三年の間、夜なく、逢坂の盲が庵の邊に行きて、その曲を「今や弾く、今や弾く。」と密かに立聞きけれども、更に弾かざりけるに、三年といふ八月の十五日の夜、月少しうは曇りて、風少し打吹きたりけるに、博雅、あはれ、今宵は興あるか。逢坂の盲、今夜こそ流泉啄木は弾くらめ。」と思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、盲、琵琶を搔鳴らして、ものあはれに思へる氣色なり。博雅これを極めて嬉しく思ひて聞く程に、盲獨り心をやりて詠じて曰く、  
逢坂の關のあらしのはげしきに

しひてぞゐたるよをすごすとて

とて、琵琶を鳴らしたるに、博雅これを聞きて、涙を流して、あはれと思ふこと限なし。盲獨言に曰く、あはれ、興ある夜かな。若し我にあらず、すき者や世にあらむ。今夜心えたらむ人の來よかし。物語せむ。」といふを博雅聞きて、音を出して、玉城に在る博雅といふ。こそこれに來たれ。」といひければ、盲の曰く、かく申すは誰にかおはすと。博雅の曰く、我はしかくの人なり。強ちにこの道を好むによりて、この三年この庵のあたりに來つるに、幸に今宵汝に會ひぬ。」盲これを聞きて喜ぶ。その時に、博雅も喜びながら庵の中に入りて、かたみに物語などして、博雅、流泉啄木の手を聽かむ。」といふ。盲、故宮はかくなむ彈き給ひし。」とて、件の手を博雅に傳へしめてけり。博雅琵琶を具せざりければ、唯口



傳をもてこれを習ひて、返すく喜びて、曉に歸りにけり。  
これを思ふにもろくの道は、たゞかくの如く好むべきなり。  
それに近代は實に然らず。されば、末代には諸道に達者は少な  
きなり。げにこれあはれなることなりかし。蟬丸卑しきもの  
なりと雖も、年頃宮の彈き給ひける琵琶を聽き、かく極めたる上  
手にてありけるなり。それが盲になりければ、逢坂には居た  
るなりけり。それより後、盲の琵琶は世に始れるなりとなむ、語  
り傳へたるとや。(今昔物語)

一七 鹽原

尾崎紅葉

鹽原  
栃木縣鹽谷郡鹽  
原温泉  
尾崎紅葉  
名は徳太郎  
小説家  
江戸生  
明治三十六年歿  
年三十七

車は馳せ、景は移り、境は轉じ、客は改れど、我はかはらざるその悒  
鬱を抱きて、やるかたなき五時間のひとりに倦疲れつゝ、はじめ  
のあつちの山

西那須野の驛  
栃木縣那須郡太  
田原の西にある  
奥羽線の停車場  
那須野が原  
那須火山の南東  
麓の廣い裾野

て西那須野の驛に下車せり。直ちに西北に向ひて、今なほ茫々  
たる古の那須野が原に入れば、天は濶く、地は遐かに、たゞ平蕪迷  
ひ、斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原はそこぞと  
見えて行くほどに、路は窮らず。漸く千本松を過ぎ、進みて關谷  
村に至れば、人家の盡くるところに、涼々の響ありて、これにかゝ  
れるを入勝橋となす。

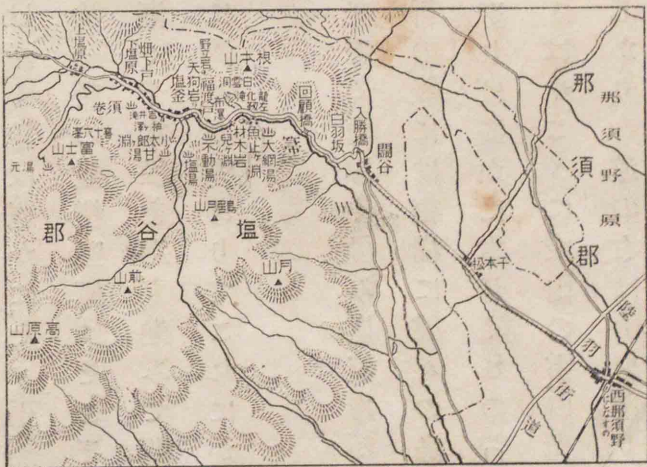
輒ち橋を渡りて、僅かに行けば、日光暗く、山厚く、疊み、嵐氣冷かに、  
壑深く陥りて、いくめぐりせる九折の、後には密樹に聲々の鳥啼  
き、前には幽草歩々の花を開き、愈登れば遙かに木がくれの音の  
み聞えし流の水上は、浅く見えて、すはやこゝに空山の雷、白光を  
放ちて崩れ落ちたるかとすさまじかり。道の右は山を削りて  
長壁となし、石幽に蘚碧うして、幾條ともなく白絲を亂し懸けた

花  
シユウ  
シユウ  
シユウ

那須野



る細瀑小瀑の珊々として灑げるは、嶺上の松の調も定めてこの緒よりやと、見すてがたし。  
 車を驅りて白羽坂を踰えてより、回顧橋に三十尺の飛瀑をふみて、山中の景は始めて奇なり。これより行きて、道あれば水あり、水あれば必ず橋あり、全溪にして三十橋。山あれば巖あり、巖あれば必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑。地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり、全村にして四十五湯。なほ數ふれば、十二勝、十六名所、七不思議、誰か一々探り得べき。



鹽谷附近

抑、鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峯の間を分けて深く西北に入り、綿々として箒川の流に派る片岨にして、到る處巉巖の水を夾まざるなきは、宛然青銅の藥研に瑠璃末を碎くに似たり。先づ大網の湯を過ぐれば、根本山魚止瀧、左鞞の嶮は古りて、白雲洞は朗かに、布瀑瀧が鼻材木岩、五色岩、船岩などと眺め行けば、鳥居戸、前山の翠衣に染みて、福渡戸の里に入るなり。途すがら前面の崖の處々に躑躅の残り、山藤の懸れるが甚だ興ありと目留れば、又此の邊殊に谿淺く水澄みて、大いなる古鏡の沈めるが如く、深く蔽へる岸樹は陰々として眠るに似たり。車夫を顧み、處の名を問へば、不動澤といふ。遙かに望めば、行路の雲間に塞がりて、咄々何等の物かと先づ驚かさる、屏風巖、地を抜く何百丈と見あぐる絶頂には、ばら〜

Handwritten notes in the bottom right corner of the right page, including the characters '山' and '谷'.



と松も危く立ちすくみ、幹竹割に割放ちたる断面は半空より一文字に垂下して、岌々たるその勢、幾ど眺むる眼も留らず。「これこそ名にし負ふ天狗巖なれ」と、はるかにも車夫は案内す。

足にまかせて彼の巖の頭上に聳ゆる邊に到れば、谿急に激折して、水これが爲に鼓怒し、咆哮し、噴薄激盪して、奔馬の亂れて競ふが如し。寛かに百人を立たしむべき大磐石、風雨に歳經る膚は死灰の色をなして、鱗も添はず、毛も生ひざれど、狀恐しげにうづくまりて、老木の陰を負ひ、急湍の浪にひたりて、夜なく、天狗巖の魔風に誘はれて吼えもしぬべき怪しの物なり。「その昔蒲生氏郷此の處に野立せしことあるに因りて野立石と申す」と、例のが説出す。

蒲生氏郷  
戰國時代の武將  
會津(百萬石)の  
城主  
文祿四年(三十五  
年)四十

率ゐたる車に乗りて急ぐ。甘湯澤、小太郎が淵など思ひやりつ

つ、鹽釜の湯は早くも過ぎて、いつしか畑下戸の里に着きぬ。一村十二戸、温泉は五箇所に涌きて五軒の宿あり。こゝに清琴樓と呼べるは、南に方りて箒川の緩くめぐれる磧に臨めり。俯せば水石の瀾々たるを見、仰げば西は富士喜十六の翠巒と對し

尾崎紅葉筆蹟  
て、清風座  
に滿ち、袖  
の澤を落

筆蹟  
打出て、見れば  
若葉つむへき雪  
あらず  
紅葉

ちくる流は二十丈の絶壁に懸りて素練を垂れたる如き吉井瀑となり、東北は山又山を重ねて、琅玕の玉簾ふかく、一望の下、丘壑の富を擅にし、林泉のおごりを窮めらるゝなど、またあるまじき別境なり。我はこの繪を看るとき、清穩の風景にあひて、かの途上嶮しき巖と激しき流との爲に幾度か魂飛び肉消して理む



地

る方なくかき亂されし胸のうちは、藹然として頓に和ぎ、恍然としてすべて忘れたり。  
 まことによくこそ我は來つれ。何ぞ來ることの甚だ遅かりし。山の麗しといふも壤の堆きのみ。川ののどけしといふも水の逝くに過ぎざるのみ。牢として抜くべからざるわが半生の痼疾はいかだ壤と水との醫すべきものならんと齒牙にも懸けず侮りたりしおのれこそ、まづ侮らるべきおろかものなれや。  
 見よく、木々の緑も、浮べる雲も、秀づる嶺も、流るゝ溪も、そばだつ巖も、吹きくる風も、日の光も、雞の啼く音も、空の色も皆おのづから浮世のものならで、我はこゝに憂を忘れ、悲みを忘れ、苦みを忘れ、勞を忘れて、身はかの雲と軽く、心はこの水と淡し。希はくは今より此の如くにしてわが生を終へんかな。(紅葉全集)

北畠親房

吉野朝の忠臣  
 從一位准三后  
 正平九年(1076)  
 薨  
 年六十三  
 又の年  
 延元三年(1196)  
 顯家卿  
 親房の長子  
 延元三年(1196)  
 戦歿  
 年二十一  
 親王  
 義良親王  
 後御即位あつて  
 後村上天皇と申す  
 苔の下  
 諸共に苔の下に  
 は朽ちずして埋  
 れぬ名を見るぞ  
 悲しき  
 (和泉式部)  
 男山  
 山城國男山八幡  
 宮  
 陸奥の皇子  
 義良親王

一八 吉野の宮

北畠親房

又の年戊寅の春二月、鎮守府大將軍顯家卿、また親王を先だて申し、かさねて打上る。海道の國々悉く平ぎぬ。伊勢、伊賀を経て大和に入り、奈良の京になん着きにける。それより處々の合戦、あまた、び互に勝負ありしに、同じき五月、和泉の國にての戦に、時や至らざりけん、忠孝の道こゝにて極りにき。苔の下にも埋れぬものとは、たゞ徒らに名をのみぞ留めし。心憂き世にもあるかな。官軍なほ心を勵まして、男山に陣を取りて暫く合戦ありしかど、朝敵忍びて社壇を焼拂ひしより、事成らずして引退く。北國に在りし義貞も度々召されしかど上りあへず、させる事なくて空しくさへなりぬと聞えしかば、いふばかりなし。さてしも止むべきならずとて、陸奥の皇子又東へ向はしめたま



顯信  
顯家の弟

ふべき定めあり。左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三位に敘せられ、陸奥介鎮守府將軍を兼ねて遣はさる。東國の官軍悉く彼の節度に從ふべき由を仰せらる。親王は儲の君に立たせ給ふべき旨申し聞かせたまふ。

七月の末つ方、伊勢に越えさせ給ひて、神宮に事の由を啓して御船の艤ひし、九月の初、纜を解かれしに、十日あまりの事にや、上總の地近くより、空の氣色おどろしく、海上荒くなりしかば、又伊豆の崎といふ方に漂はれしに、いとゞ波風夥しくなりて、數多の船行方知らずなりけるに、皇子の御船は障りなく伊勢の海に着かせ給ふ。顯信朝臣は元より御船に候ひけり。同じ風のまぎれに、東を指して、常陸の國なる内の海に着きたる船ありき。方々に漂ひし中に、この二つの船、同じ風にて東西に吹分けらる。

内の海  
霞ヶ浦

舊都  
京都  
光明院おはす

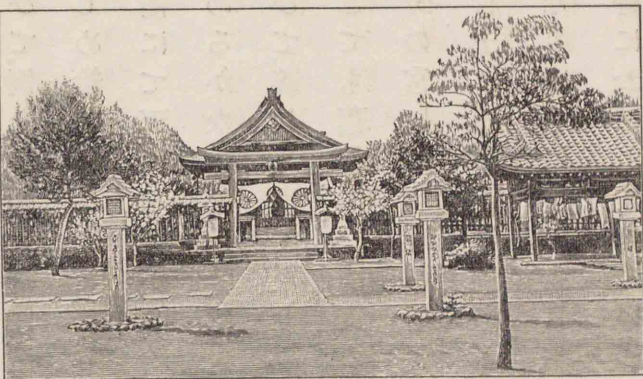
末の世には珍らかなる例にぞあるべき。儲の君に定まらせ給ひて、例なき鄙の御住居も如何と覺えしに、皇大神のとゞめ申さしめ給ひけるなるべし。後に吉野に入らせましゝて、御目の前にて天位を嗣がせ給ひしかば、いとゞ思ひ合せられ、尊くもあるかな。又常陸はもとより志す方なれば、御志ある輩相計らひて、義兵こはくなりぬ。

さても舊都には、戊寅の年の冬改元して、曆應とぞいひける。吉野の宮にはもとの延元の號なれば、國々も思ひくゝの年號なり。唐土にはかゝる例多かれど、此の國には例なし、されど四年にもなりぬるにや。大日本島根は固より皇都なり、内侍所神璽も吉野におはしませば、いづくか都にあらざるべき。さても八月の十日餘り六日にや、秋霧に冒されさせ給ひて、かく



ぬるが内  
ぬるがうちに見  
るをのみやは夢  
といはむはかな  
き世をも現とは  
見ず(壬生忠岑)  
仲尼  
孔子は春秋を筆  
削して筆を獲麟  
に絶つた

左大臣  
關白左大臣藤原  
經忠



吉野の神宮

れましましぬとぞ聞えし。ぬるが内なる夢の世、今に始めぬ習  
とは知りながら、かずく、目の前な  
る心地して、老の涙も乾きあへねば、  
筆の跡さへ滞りぬ。むかし仲尼は  
獲麟に筆を絶つとあれば、こゝにて  
止りたけれど、神皇正統の邪なるま  
じきことわりを申し述べて、素意の  
末をもあらはさまほしくて、強ひて  
記しつくるなり。かねて時をも悟  
らしめたまひけるにや、前の夜より  
親王をば左大臣の第に移し奉られ  
て、三種の神器を傳へ申さる。後の號をば、仰のまゝにて後醍醐

胎中天皇  
應神天皇

今の帝  
後村上天皇

天皇と申す。天下を治めたまふこと二十一年、五十二歳おまし  
ましき。  
昔、仲哀天皇熊襲を攻めさせたまひし時、行宮にて神さりましま  
しき。されど神功皇后程なく三韓を平げ、諸皇子の亂を鎮めら  
れて、胎中天皇の御代に定まりき。この君聖運ましまし、かば、  
百七十餘年中絶えにし一統の天下を知らせ給ひて、御目の前に  
て日嗣を定めさせ給ひぬ。功もなく徳もなき盗人世に起りて、  
四年あまりが程宸襟を惱まし、御世を過させたまひぬれば、御怨  
念の末空しくありなんや。今の帝亦天照大神よりこの方の正  
統を受けまし、ぬれば、この御光に争ひ奉る者やはあるべき。  
なか／＼かくて鎮るべき時の運とぞ覺ゆる。(神皇正統記)



一九 如意輪堂

霜月 正平二年(1109)十一月十日  
 阿部野 攝津國天王寺より住吉までの野今は大阪市の内  
 渡邊の橋 今の大阪市天満橋と天神橋との間にあつたといふ  
 四條繩手 大阪府河内國北河内郡四條村  
 兩度の合戦 河内國譽田林の戦と攝津國阿部野の戦  
 將軍 足利尊氏  
 左兵衛督 足利直義

阿部野の合戦は霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋よりせき落されて流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、河より引上げられたれども、秋の霜、肉を破り、曉の氷、膚に結びて、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脱替へさせて身を温め、藥を與へて創を療せしむ。此の如く四五日皆勞りて、馬に乗る者には馬を引き、物具失へる人には物具を着せて、色代してぞ送りける。されば敵ながらその情を感ずる人は、今日より後、心を通ぜんことを思ひ、その情を報ぜんとする人は、軀て彼の手に屬して、四條繩手の合戦に討死をぞしける。さても今年兩度の合戦に、京勢無下に打負けて、畿内多く敵の爲に侵し奪はる。遠國亦蜂起しぬと告げければ、將軍左兵衛督の

淀

京都府山城國久世郡淀町  
 淀川の左岸にある  
 八幡 同國綴喜郡八幡町  
 淀川の左岸にある

討死

延元元年(1196)五月十七日

周章、只熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏、國々の催し勢など、を向けては叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國・中國・東山・東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。  
 京勢雲霞の如く、淀・八幡に着きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行、舍弟正時、一族打連れて、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成、厄弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休めまゐらせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻上り候ひし間、危きを見て命を致す所、豫て思ひ定め候ひけるかに依つて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ了んぬ。その時、正行十一歳に罷り成り候ひしを、合戦の場へは伴はで河内へ歸し、死に残り候はんずる一族を扶持し、朝敵を滅し、君

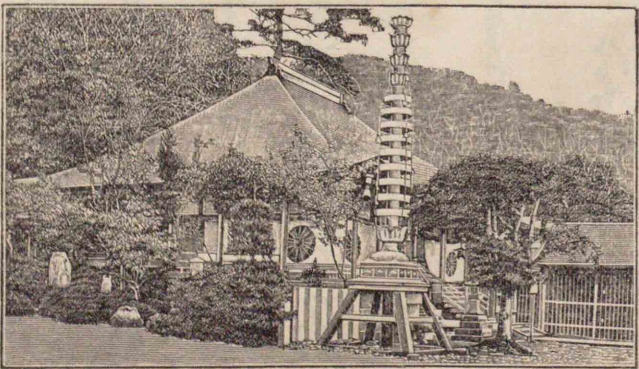


有待の身  
凡夫無常の身

を御代に即け參らせよ。」と申し置きて死にて候。然るに正行正時已に壯年に及び候ひぬ。この度我と手を碎く合戦を仕り候はずば、且は亡父の申しし遺言に違ひ、且は武略の言甲斐なき謗に落ちぬと覺え候。有待の身思ふに任せぬ習にて、病に犯されて早世仕る事候ひなば、只君の御爲には不忠の身となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、今度師直・師泰にかけ合ひ、身命を盡し合戦仕つて、彼等が頭を正行が手にかけて取り候か、正行正時が首を彼等に取りられ候か、その二つの中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顏を拜し奉らん爲に參内仕つて候。」と申しもあへず、涙を鎧の袖に懸けて、義心その氣色に顯れければ、傳奏未だ奏せざる先に、まづ直衣の袖をぞ濡されける。

主上すなはち南殿の御簾を高く捲かせて、玉顔ことに麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、  
「以前兩度の戦に勝つことを得て、敵軍の氣を屈せしめ、叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功返すくも神妙なり。」

大敵今勢を盡いて向ふなれば、今度の合戦は天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずる事は、勇士の心とする所なれば、今度の合戦命を下すべきにあらずと雖も、進むべきを知つて進むは、時を失はしが爲なり、退くべきを見て退く



如意輪堂



筆蹟

鎮守社壇回祿、  
事、殊以驚歎入  
候。但神體不燒  
失火中御坐候  
條、末代之奇瑞、  
言語道斷候歟。  
念可經奏開  
候。恐々謹言。  
五月二十六日  
正行花押  
觀心寺々僧御中

は、後を全うせん爲なり。朕汝を以て股肱とす。慎んで命を全  
うすべし」と仰せ出されけ  
れば、正行頭を地に付け、と  
かくの勅答に及ばず、只之  
を最後の参内なりと思ひ  
定めて退出す。  
正行正時和田新發意舍弟  
新兵衛以下、今度の軍に一  
足も引かず、一處にて討死  
せんと約束したりける兵  
百四十三人、先皇の御廟に  
参りて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂

鎮守社壇回祿事仕  
終始入任祚存不焼  
失火中御坐候  
奇瑞言語道断候歟  
念可經奏開  
候。恐々謹言  
五月二十六日  
正行花押

楠 木史 正徴 行墨 筆賣 蹟

の壁板に、各、名字を過去帳に書きつらねて、その奥に

かへらじとかねて思へば梓弓

なき數に在る名をぞとむる

と、一首の歌を書留め、逆修の爲と覺しくて、各、鬢髪を切りて佛殿  
に投入れ、その日吉野を打出でて敵陣へとぞ向ひける。(太平記)

### 110 月の夜さむ

元弘三年九月十三日三首の歌講ぜられし時月前擣衣

といふことを

後醍醐天皇御製

聞きわびぬはつき長月ながき夜の

月の夜さむにころもうつ聲

元弘三年隱岐國より忍びて出でさせ給ひける時源長

元弘三年  
後醍醐天皇の御  
代(一九三)

源長年  
名和長年



船上山  
鳥取縣東伯郡に  
峙つ山

年御迎へに参りて船上山といふ處へなし奉りける程  
の忠ためしなかりし事などしるしおかせましくけ  
るものの奥に書きそへさせ給ひけるとぞ  
忘れめやよるべもなみの荒磯を

御舟のうへにとめし心は

百首の歌よませ給ひて前大納言爲定の許へ遣はされ  
ける中に  
後村上天皇御製

あはれはや浪をさまりて和歌の浦に

みがける玉をひろふ世もがな

吉野の行宮にて人々に千首の歌めされし序に山花と  
いふ事をよませ給ひける 長慶天皇御製  
わが宿とたのまずながら吉野山

爲定

藤原氏  
歌人  
新千載集の撰者

宗良親王

後醍醐天皇の皇  
子  
新葉集の撰者

籠手指原

埼玉縣武藏國入  
間郡所澤町の西  
四軒

花になれぬる春もいくとせ

あづまの方に久しく侍りてひたすらものゝふの道に  
のみたづさはりつゝ征東將軍の宣旨など下されしも  
思の外なるやうに覺えてよみ侍りし

中務卿宗良親王

思ひきや手もふれざりし梓弓

おきふし我が身なれんものとは

同じ頃武藏國へうち越えて籠手指原といふ處におり  
ゐて手分などし侍りし時いさみあるべきよしつはも  
のどもに仰せ侍りしついでに思ひつゞけ侍りし  
君のため世のためなにか惜しからむ  
捨ててかひあるいのちなりせば



新待賢門院  
後醍醐天皇の中  
宮藤原康子

文貞公  
藤原師賢  
吉野朝の忠臣

後醍醐天皇かくれさせ給ひて又の年の春花を見てよ  
ませ給ひける  
新待賢門院

時しらぬなげきのもとに如何にして

かはらぬ色に花の咲くらむ

題しらず  
文貞公

うれへあれば聞くこといとふわが身とも

知らでやこゝにうぐひすの鳴く

元弘元年八月俄かに比叡山に行幸なりぬとて彼の山  
に登りたりけるに湖上の有明殊におもしろく侍りけ  
れば

思ふ事なくてぞ見ましほのゝと

有明の月の志賀のうら波  
〔新葉和歌集〕

### 二 煤はらひ

手の甲へ餅をうけとる煤はらひ  
轉寐の顔へ一冊屋根にふき  
おさへればすゝきはなせばきりくす  
よつびいてひようと放さぬ案山子かな  
本降になつて出てゆく雨やどり  
泣くくも良い方をとる形見わけ  
毎夜出て人をつかんで食ふ按摩  
清盛の醫者ははだかで脈をとり  
芭蕉は飛びこみ道風は飛びあがり  
おつかさんまた越すのかと孟子いひ

飛びこみ  
古池や蛙飛びこ  
む水の音  
〔芭蕉〕



釣れますかなどと文王そばへより

二二 雪前雪後

幸田露伴

幸田露伴  
名は成行  
文學者  
文學博士  
慶應三年(三五七)  
江戸生

雨も好し、露も好し、霞も、霰も、天より降るものの面白からぬは無きが中に、雪はまた特にめでたし。降らんとして未だ降らず、灰色の雲の天空を蔽ひて風無き寒さに雀ふくらむ程は兎もあれ角もあれ、そと下す風に連れて、ちら／＼と降出づる始より、檐の玉水日に耀ふ光長閑に融けつくすまで、いづれかをかしからざらん。

まづ冬の雪の、粉の如く、球の如く、笹の葉に冴ゆる音立て、檜の葉に堅き音立て、板庇にはいたく跳ね返りなどしつゝ、さら／＼と降りたる、見るにも興あり、聞くにも面白し。又春の雪の大きく

軽らかに降りて、落つる間もなく色なき水の昔にかへる淡々し

江上午景

山古りて 樹重ねて 新

浅みどり 又 深みどり

水光り また 水くもる

露伴漫吟

幸田露伴筆蹟

鹿子斑の夏の富士を見せ、松  
梅、樅などの梢には天華俄か  
に落ちかゝるかと思はしむ  
るも趣あり。

されど降る最中の雪の、見て  
美しきは、冬の末かけて春の  
初の頃、陽氣既に動きて陰氣

猶いと盛なる時のことなり。寒さ甚だしからねば雪細かならず、暖かさ未だしければ雪は水めかずして恰も好く、且大きく且

筆蹟  
江上午景  
山古りて樹重ね  
て新に浅みどり  
又深みどり風寝  
ねて雲猶あゆみ  
水光りまた水く  
もる  
露伴漫吟

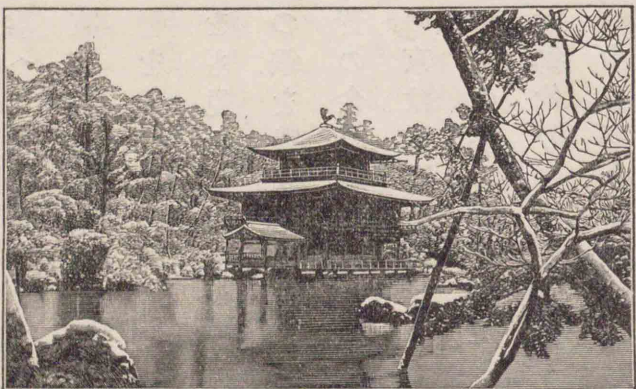


輕やかなるに、しかも一年の中最も降るべき折なれば、その霏々  
 紛々として盛に下るに當つては、櫻花の春天に飄るが如く、蘆絮  
 の秋風に漂ふが如く、一江の野渡には、對岸を虚無に封じて仙境  
 の縹緲を欺き、半衢の陋街には、連屋を瓊瑤に包んで、蜃樓の巍峨  
 を疑はしむ。鶴毛亂れ飛び、鷺毳飄り零つる景色、見る眼もあや  
 に美しき限なり。

すべて降る時の眺には、廣きところより狭きところ好し。玉屑  
 珠塵いと清きことは清けれども、もと色を奪ひ光を障ふるもの  
 なれば、降りしきる真中は、遠きは全く見えずして、廣きは却て狭  
 くなり、近きは聊か霞みて狭きは却て廣くなり、大川よりは山間  
 の溪、廣野よりは市中の園よろし。  
 霽れての後こそ雪は目ざましけれ。塵埃拭ひ盡して鏡新に明

馬をさへ眺むる  
 馬をさへ眺むる  
 雪のあしたかな  
 (芭蕉)

梅尾  
 槇尾  
 共に京都市右京  
 区にある山  
 高尾と合せて三  
 尾といふ  
 紅葉の名所



雪の金閣寺

かなる空の蒼々と朗かなるが下に、渣滓鍊り去つて銀曇なき地  
 の皎々と白きが、見る眼もはゆく  
 遙かに開けたる、常の日はたゞ裾  
 寒き風の枯草を吹くのみなる空  
 野の取りどころ無きだに、面白く  
 おもはる。「馬をさへ眺むる」と人  
 の云ひたる旦、朝日の光いと花や  
 かなるに、疎林に禽起つて飛んで  
 また還る、有りふれたる郊外のさ  
 まながらもよし。

山・清水皆晝とすべし。梅尾槇尾は見ねば知らぬぞ口惜しき。



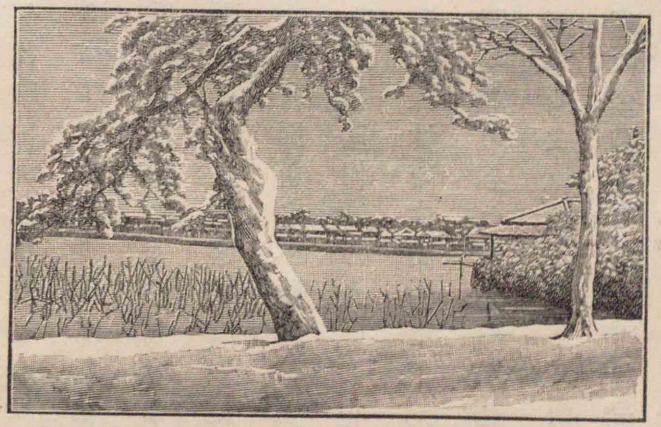
木曾の寢覺の床の巖は鬼斧に任せて千古冷かに峙ち、潭は藍靛を湛へて一脈徐に流るゝ雪の日の凍れる寂しさに、翠蓋稍重く、壁の簷を戴ける松の村立のあたり、姿をも見せて名をも知らぬ山の禽の餓を鳴きたるなんと、二十年の昔の余の胸に鮮かなり。

東の京は御溝の水おだやかに、浮寝の禽の夢も安けく、雪に閑かなる大御代の午、また比無くめでたし。

山王臺今猶好からんが、溜池の有りし昔いたづらになつかし。

不忍の池一望千頃の景はい

山王臺  
麴町區にある小丘  
日枝神社のある處  
溜池  
山王臺の東南麓にあつたが今は埋められて宅地になつた



冬の不の忍池

待乳山  
隅田川の右岸淺草公園に近い丘

相生橋  
深川區越中島から京橋區新佃島に渡した橋  
中島  
相生橋の越中島寄りにある小島

はずもあれ、石橋の小やかなるを渡つて湖心に至らんとすれば、敗荷の殘莖に一撮の白きものを見たる、これも捨て難き風情あり。暮れて猶暮れ難き雪の闇夜に、何をか物言ふ鴨のさゝめきを聞きたる、水に色無く、聲に白さ有りとや云ふべき。隅田川は待乳山を望みたるも好し。山に舞臺あり、臺より望みたるも好し。一條の碧、四方の白、實に武藏野を分きて流るゝ川なりといふべし。相生橋の橋長く、中島の島小なる、取出でて言ふべきにはあらねども、南に涯無き海をすかして海鷗も雪に曇る渺茫たる景色を、欄干の玉を展べ樹立の鷺を宿したるに劃りて一幅の畫としたる、欣ぶべく、賞すべく、此處をこそ今の京には雪の見どころとすべけれ。(洗心録)



二三 つれぐ草

兼好法師

栗栖野

今の京都市東山区山科町栗栖野

神無月のころ、栗栖野といふところを過ぎて、ある山里に尋ね入

ることはべりしに、遙かなる

苔の細道をふみわけて心細

く住みなしたる庵あり。木

兼好法師の葉にうづもるゝ笥の雫な

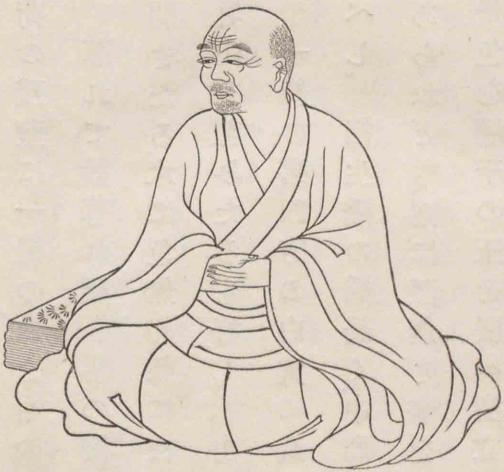
らでは、つゆおとなふものな

し。 閑伽棚に菊紅葉など折

りちらしたる、さすがに住む

人のあればなるべし。 かく

てもあられけるよとあはれに見るほどに、かなたの庭に大きな



る柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まほりを厳しくかこひたりしこそ、すこしことさめて、此の木なからましかばと覺えしか。

高名の木のほり

高名の木のほりといひし男、人をおきて、高き木にのぼせて、梢を伐らせしに、いとあやふく見えしほどは言ふこともなくて、下る時に軒たけばかりになりて、あやまちすな、心しておりよ。とことばをかけ侍りしを、かばかりになりては、飛びおるともおりなむ。いかにかくはいふぞ。と申し侍りしかば、そのことに候。目くるめき枝あやふきほどは、おのれが恐れ侍れば申さず。あやまちはやすき所になりて必ず仕ることに候。といふ。あやしき下藤なれども、聖人のいましめにかなへり。鞠も難き



ところを蹴出してのち、やすく思へばかならず落つとあるやらむ。

懈怠の心

ある人弓射ることを習ふに、もろ矢をたばさみて的に向ふ。師の曰く、初心の人二つの矢を持つことなかれ。後の矢をたのみて初めの矢になほざりの心あり。毎度たゞ得失なくこの一矢に定むべしと思へといふ。

わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろそかにせむと思はむや。懈怠の心みづから知らずと雖も、師これを知る。このいましめ萬事に互るべし。

道を學する人、夕には朝あらむことを思ひ、朝には夕あらむことを思ひて、重ねてねんごろに修せむことを期す。況や一刹那の

最明寺入道

執權北條時頼  
出家して鎌倉の  
最明寺(今の明  
月院の地)に居  
た  
平宣時  
大佛陸奥守北條  
宣時

うちにおいて懈怠の心あることを知らむや。何ぞ唯今の一念において直ちにすることの甚だ難き。

最明寺入道

平宣時朝臣、老の後むかしがたり、最明寺入道ある宵の間に呼ばるゝことありしに、「やがて」と申しながら直垂のなきて、とかくせしほどに、また使來りて、「直垂などのさぶらはぬにや。夜なればことやうなりとも疾く。」とありしかば、なえたる直垂、うちくのまゝにてまかりたりしに、銚子にかはらけとり添へてもて出でて、「此の酒をひとりたうべ



北條時頼  
京都萬壽寺藏



石清水  
京都府山城國綴  
喜郡八幡町男山  
の石清水八幡宮  
仁和寺の南二十  
餘軒

仁和寺  
京都市右京區御  
室にある眞言宗  
の寺  
極樂寺  
高良  
共に男山の麓に  
ある寺社

むがさうぐしければ申したるなり。肴こそなけれ、人はしづまりぬらむ、さりぬべきものやあると、いづくまでも求めたまへ。とありしかば、紙燭さして、くまぐまを求めしほどに、臺所の棚に、小がはらけに味噌の少しつきたるを見出でて、これぞ求め得てさぶらふと申ししかば、事足りなむとて、心よく數獻におよびて興に入られはべりき。この世にはかくこそはべりしかと申されき。

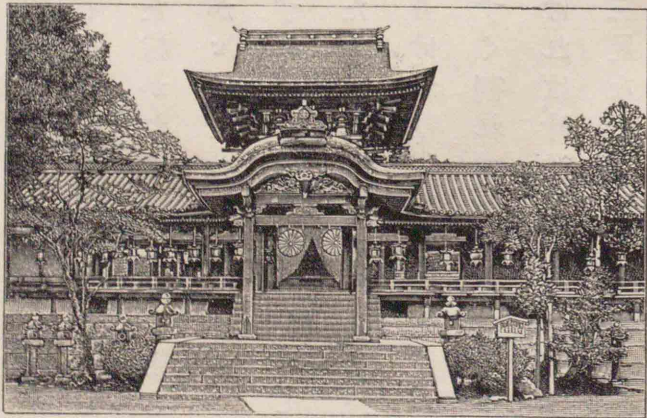
石清水詣

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心うく覺えて、あるとき思ひ立ちて、たゞ一人かちより詣でけり。極樂寺、高良など拜みて、かばかりと心得て、歸りにけり。さてかたへの人に逢ひて、年頃思ひつること果しはべりぬ。聞きしにも過

ぎて尊くこそおはしけれ。そも参りける人ごとに山へ登りしは何事かありけむ、ゆかしかりしかど、神へまゐるこそ本意なれと思ひて、山までは見ずとぞ言ひける。少しの事にも、先達はあらまほしきことなり。

鼎かづき

これも仁和寺の法師、わらはの法師にならむとする名残とて、各遊ぶことありけるに、酔ひて興に入るあまり、かたはらなる足がなへを取りて頭にかづきければ、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて顔を



石清水八幡宮





入れて舞出でたるに、滿座興に入ること限なし。  
 しばし奏でて後、抜かむとするに大かた抜かれず。酒宴ことさめて、いかゞはせむと惑ひけり。と田國かくすれば、首のまはりかけて、血垂り、たゞはれにはれみちて、息もつまりければ、打割らむとすれど、たやすく割れず、ひゞきて堪へ難かりければ、叶はて、すべきやうなくて、三足なる角の上に帷子をうちかけて、手を引き杖をつかせて、

京なるくすしがりゐて行きけり。道すがら人の怪しみ見ること限なし。醫師のもとにさし入りて向ひ居たりけむ有様、さこそはことやうなりけめ。物を言ふも、くゞもり聲に響きて聞えず。「かゝることは書にも見えず、傳へたる教もなし。」と言へば、又仁和寺に歸りて、親しきもの、老いたる母など枕がみに寄りゐて泣悲しめども、聞くらむとも覺えず。  
 かゝる程に或者のいふやう、たとひ耳鼻こそきれうすとも、命ばかりはなどか生きざらむ。たゞ力を立てて引きたまへ。」とて、薬のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻缺けうげながら抜けにけり。辛き命まうけて久しくやみ居たりけり。(徒然草)



野口米次郎

詩人

英詩人

慶應大學教授

明治八年愛知縣

津島町生

### 二四 笑と涙

野口米次郎

四つの子供が冷い廊下を駈け、  
 途中でばたと横に倒れる。  
 顔を擧めて泣出す途端に、  
 庭に咲いてゐる菊を硝子戸越しに見る。  
 泣顔が急に笑顔と變り、  
 お父さん綺麗な花が咲いててよといふ。  
 私は思ふ、神様が人間にお植ゑつけになる涙の種も、笑の種も、  
 種には何の相違が無い、つまり一つの種から異つた花が二つ  
 咲くのだ。  
 神様の趣旨を忘れない子供だけが(あゝ子供は尊い。)

笑を涙とも、涙を笑とも、即座に變へて見せる祕密を握つてゐる。

それが段々年を取るに従つて、(どうでせう!)人間は涙と笑を箇々別々独立的に培養してしまつて、神様の御趣意に忤りながら、

自分では個性の成長だなどといつて、平氣で居ります。  
 變通自在な人間天賦の美質を不具ものにして居ります。  
 私は私の子供に向つて深く感謝する。

お前は、今日お父さんに偉い拾物をさせてくれました。

(ヨネノグチ代表詩)

### 二五 故郷の花

薩摩守忠度と申すは入道の舍弟なり。淀の川尻まで下りける

入道

平清盛

入道して淨海と

いふ



俊成卿  
皇太后宮大夫藤  
原俊成

が、郎等六騎相具して、しのびて都へ歸り上る。如法夜半のことなるに五條三位俊成卿の宿所に行きて門を敲く。内にはこれを聞きけれども、かゝる亂れの世なる上、いぶせき夜半の事なれば、敲けどもくゝあけざりけり。餘りに強く敲きければ、やゝ久しくありて青侍を出し、戸を開かせてこれを問ふ。「忠度と申す者、見參に申し入れたき事ありて參りたり」と答へければ、三位大庭に下り、世に恐れて内へは入れざりけれども、門をば細めにあけて對面あり。忠度のたまひけるは、かゝる身として御爲憚あれども、所詮一門榮華盡きて都に安堵せず、西海に落ちくだりて侍り。亡びん事疑なし。世靜まりて後、定めて勅撰の沙汰候はんか。縦ひ身は八重の潮路の底に沈むとも、藻鹽草かきおく末の言の葉、後の世までも朽ちぬ形見に傳はり侍れかしと思ひ出

引合せ  
鎧の胴の前と後  
とをひきしめあ  
はせるところ

でて、川尻よりしのび上りて侍り。これぞ年頃よみ集めたりし愚詠どもにて侍る。身と共に波の下に水屑となさん事遺恨に侍り。これを砌下に進め置き候。勅撰の時は必ず思召し出でよ。とて、卷物一卷泣くくゝ鎧の引合せより取出でたり。三位感涙を流してこれを受取り、御詠一卷預り置き候ひをはんぬ。これ永代秀逸の御形見、未來歌仙の指南たらんか。この勿劇の中に御音信に預る事、恐悦少なからず候かな。たとひ浮世を萬里の波に隔つとも、御形見をば一戸の窓にをさめて、勅撰の時は思ひ出で侍るべし。とのたまへば、忠度、今は身を波の底に沈め、骨を山野に曝すとも思ふことなし。とて、馬に乗り、古詩を

前途程遠  
大江朝綱の作

前途程遠、馳思於雁山之暮雲。  
後會期無、霑纓於鴻臚之曉淚。



しのぶ  
菘摺の衣

ながらの山

長等山

滋賀縣近江國滋

賀郡なる三井寺

の西に峙つ山

一谷

神戸市の西部海

岸にある源平の

古戦場

練貫  
經は生絲緯は練  
絲で織つた絹

とうちあげく詠じつ、南を指してぞ落ちゆきける。本文に  
は「後會期遙」と書きたるを、忠度還り見るべき旅ならず、今を限の  
別れなりと思ひければ、後會期無」と詠じけるこそあはれなれ。  
三位も残りの惜しくして、遙かにこれを見送りても、あはれ世に  
在りしには、此の人どもにこそ諂ひ追従せしに、かはるならひと  
て、今は門を隔つることの悲しさよ」と、あはれなるにも涙、優なる  
にも涙、しのぶの袖をぞ絞られる。

世靜まりて後、千載集を撰まれけるに、忠度のこの道を嗜み、川尻  
より上りたりし志を思ひ出で給ひて、故郷の花といふ題に、よみ  
人知らずとて、一首入れられたり。

さ、波や志賀の都は荒れにしを

昔ながらの山ざくらかな

萌黄匂

上は濃い萌黄色

で下へいくほど

白くぼかした絨

の色

鍬形

兜の前立てもの

の名

黄金作

黄金でつかやさ

やを裝飾したも

の

切斑

鷹の羽の中は白

く上下は黒いも

の

滋藤の弓

五分(一種半)お

きに一寸(三種)

幅に籐をまいた

弓

連錢蘆毛

蘆毛に灰色の圓

い錢をならべた

やうな斑のある

馬の毛色

金覆輪

金でふちをとつ

たもの

とよめる歌なり。名字をも顯し、數多も入れまほしかりけれど  
も、朝敵となれる人のわざなれば、憚りたまひて、只一首ぞ入れら  
れける。亡魂いかに嬉しく思ひけん。あはれにやさしくぞき  
こえし。(源平盛衰記)

### 二六 小枝の笛

さる程に一谷の軍破れしかば、武藏國の住人熊谷次郎直實、平家  
の公達の助船に乗らんとて、汀の方へや落ちゆき給ふらん、あつ  
ぱれよき大將軍に組まばやと思ひ、細路に懸つて渚の方へ歩ま  
する處に、玆に練貫に鶴縫うたる直垂に、萌黄匂の鎧着て、鍬形打  
つたる兜の緒をしめ、黄金作の太刀を佩き、二十四さいたる切斑  
の矢負ひ、滋藤の弓持ち、連錢蘆毛なる馬に、金覆輪の鞍置いて乗



五六段  
一段は六間(十  
一米位)か

つたりける武者一騎、沖なる船に目をかけ、海へさつと打入れ、五六段ばかりぞ泳がせける。熊谷「あれはいかに。よき大將軍とこそ見まゐらせて候へ。まさなうも敵に後を見せ給ふものかな。返させ給へ、返させ給へ。」と扇をあけて招きければ、招かれて取つて返し、渚に打上らんとし給ふところに、熊谷浪打際にて押並べ、むずと組んでどうと落ち、取つて抑へて首



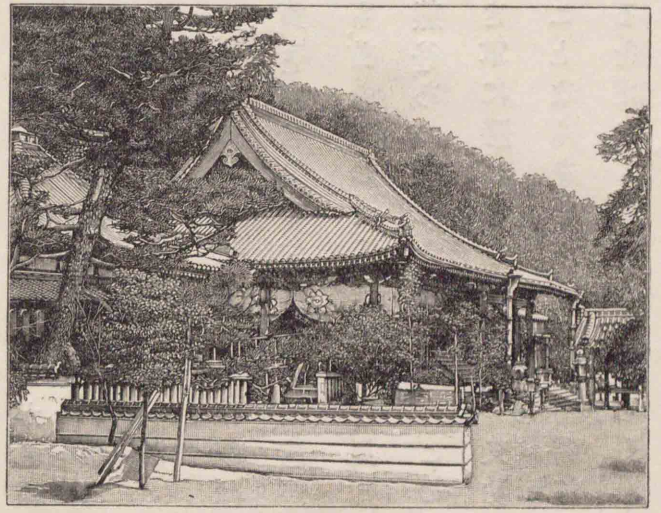
平野牧心筆  
敦磨須筆  
盛藏寺

小次郎  
直實の長子直家

をかゝんとて兜をおしのけて見たりければ、薄化粧して鐵漿かねぢり黒なり。わが子の小次郎が齡ほとして、十六七ばかりなるが、容顏まことに美麗なり。「抑、いかなる人にて渡らせ給ひ候やらん、名告らせ給へ。助けまゐらせん。」と申しければ、まづ、かういふ和殿は誰ぞ。「物その數にては候はねども、武藏國の住人熊谷次郎直實。」と名告り申す。「さては汝がためには好い敵ぞ。名告らずとも、首を取つて人に問へ。見知らうずるぞ。」と宣ひける。熊谷「あつばれ大將軍や。この人一人討ち奉つたりとも、負くべき軍に勝つべき様なし。又助け奉つたりとも、勝つ軍に負くることよもあらじ。今朝一谷にて、わが子の小次郎が薄手負うたるをだにも、直實は心苦しく思ふに、この殿討たれ給ひぬと聞き給ひて、さこそは歎き悲しみ給はんずらめ。助け參らせん。」とて、



土肥  
次郎實平  
梶原  
平三景時

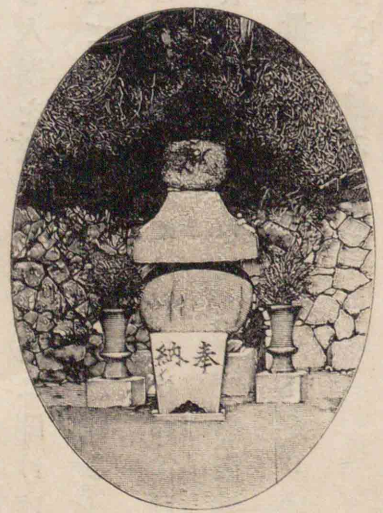


須磨寺

後を顧みたりければ、土肥・梶原五十騎ばかりにて出て来る。熊谷涙をはらくと流いて、あれ御覽候へ。いかにもして助けまゐらせんとは存じ候へども、身方の軍兵雲霞の如くに充ち満ちて、よも遁しまゐらせ候はじ。あはれ、同じうは直實が手にかけて奉つて、後の御供養をも仕り候はん。」と申しければ、たゞ如何様にも、とう／＼首を取れ。」とぞ宣

ひける。

熊谷、あまりにいとほしくて、いづくに刀を立つべしとも覺えず。目もくれ、心も消えはてて、前後不覺に覺えけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣く／＼首をぞ搔いてける。「あはれ、弓矢取る身ほど口惜しかりける事はなし。武藝の家に生れずば、何しに只今かゝる憂目をば見るべき。情なうも討ち奉つたるものかな。」と、袖を顔に押當てて、さめ／＼とぞ泣き居たる。



敦盛塚

首を包まんとて、鎧直垂を解いて見ければ、錦の袋に入れられたりける笛をぞ腰にさゝれたる。「あないとほし、この曉、城の内に



大將軍  
源義經

經盛  
平忠盛の子  
清盛の弟

上田敏  
英文學者  
文學博士  
京都帝國大學教  
授  
東京生  
大正五年歿  
年四十三

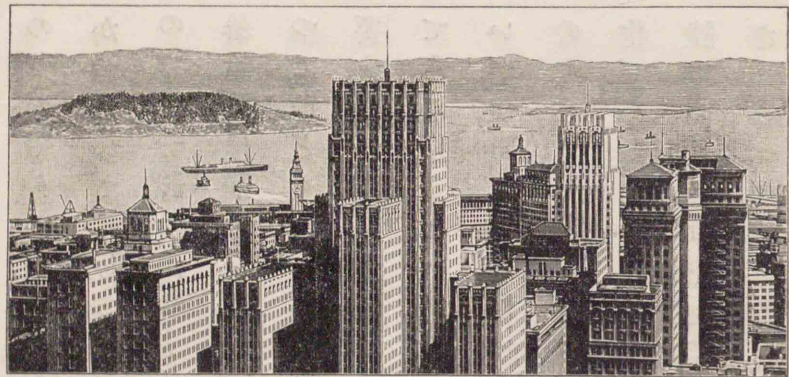
て管絃し給ひつるは、この人々にておはしけり。當時身方に東國の勢何萬騎かあるらめども、軍の陣に笛持つ人はよもあらじ。上臈はなほも優しかりけるものを」とて、これを取つて大將軍の御見參に入れたりければ、見る人涙を流しけり。後に聞けば、修理大夫經盛の乙子、大夫敦盛とて生年十七にぞなられける。これよりしてこそ熊谷が發心の心は出て來にけれ。件の笛は、祖父忠盛、笛の上手にて、鳥羽院より下し賜はられたりしを、經盛相傳せられたりしを、敦盛笛の器量たるによつて持たれたりけるとかや。名をば小枝とぞ申しける。〔平家物語〕

二七 世界の歌枕

上田敏

大西洋の浪は、太平洋のとは稍違つてゐる。太平洋の浪は大き

桑港  
San Francisco  
サンフランシスコ  
米國太平洋岸の大港



桑港

く緩く打つ。大西洋のはいつも天氣が悪い爲か、稍小さく鋭い。空の色の關係もあらう、其の色は澄んだ藍ではなくて、稍黒ずんだ、時としては鉛のやうな色に見える。大西洋も緯度が稍高くなるに随つて、浪の色が淡く、入日の華やかさは異ならぬが、夕雲の色彩も稍あつさりとして、南海の絢爛な色よりも却て美しい。私の大浪に遭つたのは、桑港に着く三日程前の一日であつた。小山の如き浪が寄せ返るので、さしもの大船も木



布哇  
Hawaii 大洋洲北部の  
群島

の葉のやうに動搖したが、幸にも此の日は頗る上天氣で、風も無かつたので、甲板の上で其の壯觀を味はふ事が出来た。大西洋の方は、一體に山なす巨浪は少ないが、米國を去つて六日目位に、暴風雨に類した天氣に出遭つて、ひどく苦しめられた。要するに、海の景色は取出でて人に語るといふことは難いが、後日に追想すると、單調のやうでも、其の美は千變萬化である。これ實に究竟の歌枕である。

陸上の景色は、土地によつて著しい相違があつて、一般には言盡されぬ。布哇の如き、四時氣候を同じうして太平洋の樂園と稱



布哇風景

金門灣  
The Golden Gate 桑港と太平洋  
とを結びつけ  
る海峡  
幅三軒ほど

せらるゝ地に行くと、満目の風光一變して、始めての人には非常に面白い。遠淺の海が極めて澄んだ萌黄の色に見えて、それに椰子の林が背景にあしらはれてゐる風情は、繪畫で見るよりも實際の方がよほど美しい。これからの人が、歌枕の一つとすべき處だと思ふ。カピオラニの公園に遊んだ時、蔚然たる榕樹の梢に放し飼の孔雀が止つてゐて、其の艶な羽毛が花の様であつたのを記憶する。又桑港の港近くなつた海上、數百羽の鷗が船に沿うて舞つてゐる處から遙かに眺めると、金門灣頭の大浪が港口に押寄せる有様は、水の屏風を立て廻したごとく、海の上にも瀧があるかと疑はれた。これはた歌枕に逸すべからざるものと思ふ。

熱帯地方は言ふ迄も無いが、歐米の風光は、日本に比していたく



趣を異にしてゐる。彼の國には、我が國よりも草木が少ない。見る山もく、日本のやうに松杉が山全體を蔽うてはゐない。或は芝山の如く、或はたゞ岩石のみのやうな山の處々に、たまたま青々とした草木が十數本繁つてゐるといふ風の景色が多い。それで日本人は、動もすれば我が國の景に草木の多いのを誇稱するが、それは稍偏した見方であつて、兩方共にそれ／＼の美しさがある。併しながら、その土地の極めて確であるのは、勿論景色が好いとは謂はれない。私の通過した米國の一部分は、殊に冬枯の候であつたから、人げのない、ものさびしい廣漠の野を行く心地がした。概して、あちらの木はひねくれてゐない。皆すうつと直立して、地面を離れた數尺の處から、四方に向つて枝が規則正しく手をひろげてゐる。かう規則正しくなつてゐる

枝振はいかにも風趣が乏しいやうに思はれるが、實際はさうでない。

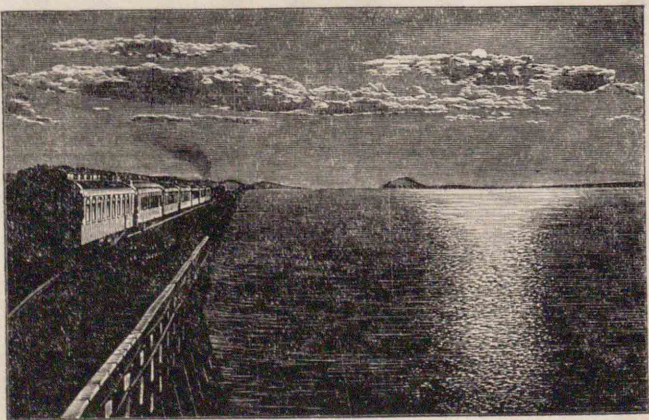
ワイオミング

Wyoming  
米國の西部にある州の名

ソルト、レーク

Salt Lake  
米國の北部ユタ州にある湖

さてアメリカの歌枕を挙げれば、まづワイオミングの平原であらう。眼の届くかぎり、一物もなく、雪がちらちら降つてゐる中を、たまに羊の群が鐵道線路のあたりをさまよふなどは、優美の觀には缺けてゐるが、一種壯大の趣がある。名にし負ふソルト、レークの鹽の湖を横斷する中央太平洋鐵道の長路を通ると、平原の間に丘陵が起伏して、雪斑の岩角に朝日の反射する景色、こ



道鐵洋平太央中るす斷橋をクレー、トルソ



コロラド  
米國の西部に  
ある州の名  
キヤニオン  
Canon  
コロラド河の  
峡谷

ニューヨーク  
米國ニューヨ  
ーク州の大  
都  
New York  
市

れ亦十分に歌枕たるの價値がある。又コロラドの北所謂キヤニヨンの一部は、奇岩怪石が路傍に轉つて、さながらの鬼斧神工と思はれる。此の景も歌枕に逸すべからざるものである。



摩天閣

いと思ふ。例へば、ニューヨークの摩天閣なども、其の或物は建築美を持つて居ないが、中には一種の新しい趣味の徹底して居

さて此の歌枕といふ詞は、もう少し意味を廣くして見たいと思ふ。即ち山水の風景ばかりに止めず、進んで紅塵萬丈の市街、煤煙の立昇る工場の光景なども詩歌に寫し出して面白

ブルックリン  
ニューヨーク  
市の一部  
Brooklyn  
ホマーケン  
ハドソン河を  
隔ててニュー  
ヨーク市と相  
望む都市  
マヂソン  
マヂソンの  
大通  
Madison  
バレルオルガン  
Barrel-organ  
手風琴  
ウォールストリ  
ート  
Wallstreet  
株式取引所の  
所在地

るものがある。ブルックリンの釣橋の上からニューヨークを望むと、建て列ねた大廈高樓が雲に聳えて、殊に薄暮は二十階三十階の窓の燈が、空の星かときらめいて輝く。又ホマーケンの港口など、朝霞の匂、夕暮の色、他國に無い趣味がある。更に進んで人情、風俗を加へて景色を見ると、愈々好箇の歌枕がある。

ニューヨークはマヂソンの大通、世界の富を集めた繁華な場所に立つて、イタリーの移民が弾く哀なバレルオルガンの聲を聞くと、聲こそは細けれ、近代文明の弊害を呪ふ切實の音楽かとも聞える。またはウォールストリートの執務時間に其の邊を通ると、黄金の爲に萬人が血眼になつて狂ふ様な、賭博場を見るよりも猶慘澹たる感じを與へる。又、これとは反對に、冬の田舎に入つて見ると、葉の落ち盡した楓樹の並木路を、雪を蹴つて小學兒



童の走つて行くなど、若き米國萬歳の聲を發したい位である。

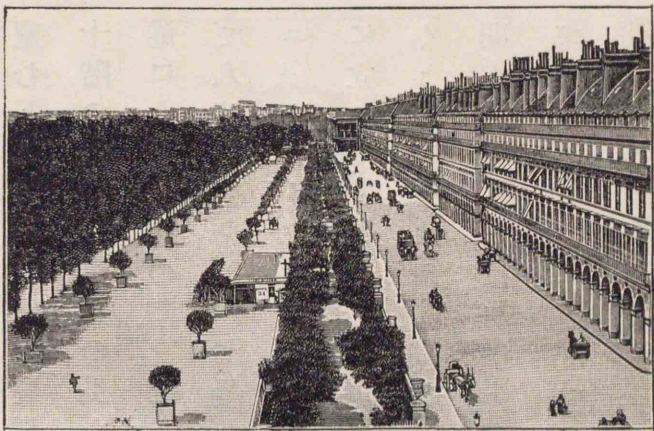
ニューイングランド

New England 米國の東部地方

パリ  
Paris フランス國の首府

シャンゼリゼー  
Champs Elysses

長安  
陝西省西安府周以後西漢・隋・唐時代までの都



巴里里香登里大通道

大通は、實に盛唐の長安もものかは、端麗高雅、世界第一である。

ニューイングランドの田舎の景色は、落着いて若々しい。如何にも懐かしい感じを與へる。歐米の大都會中、どこが好いといはれたなら、誰もく賞めるのはパリであらう。市街の美觀、道路の整頓は言ふに及ばず、氣候は溫和、風光は佳麗、風俗は優雅、かういふ處に住んで詩でも讀んでゐたいとは誰も望む所かと思ふ。シャンゼリゼーの

セーヌ  
Seine パリ市中を流れる川

ノートルダム寺  
Notre-dame パリにある  
ゴシック式

Gothic architecture

歌枕はどこにもごろくしてゐる。文明の最高に位するはフランスである、而してパリである。あくまで華美を極めた町の中にも、何處となく超脱した趣がある。車馬絡繹たるセーヌの河岸に、悠然綸を垂れる隱君子もある。橋の下には犬の髪結床がある。河岸の石垣の上にはお馴染の古本屋がある。有名なノートルダム寺の建築はゴシック式の標本で、朝夕の色の變化が著しい。嘗てノートルダムのすべての變化を味ははうと、一日一晚の間、眺め暮した事もあつた。その最も美觀を極めるのは夕方の景色で、さながら黄金の光を浴びたやう。また夜のしらじらとあけて、朝風の心地よく頬を拂ふ時、之を望むのも好い。眞珠の色を曇らせた様な色から薔薇色のはてやかなのに至るまでの色合の微かな匂を味はふことが出来る。其の外、花賣る



シャルロット  
Charlotte  
ベルシロン  
Percheron  
ターナー  
Turner (1775-1851)  
英國の風景畫家  
テムズ  
Thames  
ロンドン市を西より東に貫流する河  
リッチモンド  
Richmond  
英國ヨーク州の古城市  
ナポリ  
Napoli (Naples)  
イタリア南部の都會

老媪の風、シャルロットの帽子を被つて、ボールの箱を抱へた店通ひの賣子の姿、ベルシロンといふ牛よりも大きな馬を牽く馬丁の振、夜半近く芝居のはねた後に、雨が降つて幾千の街燈の光が敷石に映る所、自動車が唸り馬車が軋る不夜城の壯觀、満目の時勢粧、皆歌枕ならぬはない。

ロンドンには佳景の地とは誰も認めないが、その色彩の變化、色合の豊かな點は、ターナーの繪にある通りで、頗る味はふ値がある。併し同じく風光を味はふにしても、住心地よいパリの方が、あらゆる旅客の稱揚する所だと思ふ。たゞロンドンにもテムズ上流のリッチモンド邊からの兩岸の風景には、英國特有の美觀が現れて居る。此の他、風車、朱い屋根、清い淀に名あるオランダもよく、イタリアではナポリ邊の夢のやうな景色もよい。スウ

ザルツブルヒ  
Salzburg  
イギリス海峡  
English Channel  
英佛兩國の間にある海  
紅海  
Red Sea  
アラビヤとアフリカとの間にある海  
島崎藤村  
名は春樹  
小説家  
詩人  
明治五年長野縣木曾生

イスは風光明媚と稱せられる國で、誰も皆嘆賞するが、私は寧ろ南ドイツを採る。南ドイツのザルツブルヒの景は日本によく似てゐる。

要するに、何處の風光が一番勝れてゐるといふ事は、一概に言ひ難い。見る人の心々によつて、如何なる處にも、相當の美は味ははれるのである。浪の高いイギリス海峡の船の上でも、暑さの堪へ難い紅海航行の甲板でも、それ／＼の美は感ぜられる。元來歌枕などと取出してきめるのは、間違つてゐるかも知れぬ。

天下皆歌枕ではあるまいか。(心の花)

二八 隅田川の水よ

島崎藤村

流よ、流よ、隅田川の水よ。少年の時分からのお前の舊馴染が復



旅にある日  
 大正二年フラン  
 スへ行き同五年  
 歸朝  
 ソーン  
 Saône 東部フランス  
 を流れる川  
 ヴィエンヌ  
 西部フランス  
 にある川  
 Vienne ロアール川の  
 上流  
 ガロンヌ  
 南部フランス  
 を流れる川  
 Garonne  
 アウステルリッ  
 ツの橋  
 Austerlitz ナポレオン戦  
 捷記念の橋  
 都鳥  
 武藏國と下總國  
 との中にある隅  
 田川のほとりに  
 至りて……白き

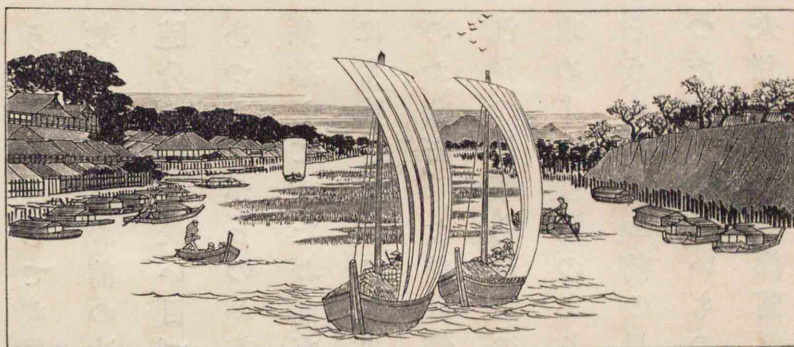
お前の懐裡へ歸つて来た。旅にある日、ソーン・ヴィエンヌ・ガロンヌなどの河畔に立つて私が思ひ出すのは、何時でもお前のことだつた。巴里のアウステルリッツの橋の畔あたりからセーヌの水を眺めた時にも、私の遠く送る旅情はお前の方にあつた。私はお前の岸に歸つて来て、ふたゝびお前の水を見得ることを喜ぶ。

私が旅に出た時分から見ると、お前は一層黙つてしまつたやうな氣もする。お前の聲はどうしたらう。何時までお前はそんなに沈黙を續けて居るのだらう。お前の河岸の變遷と工業化とに壓せられて、お前の白魚が死に、お前の都鳥が飛去つたやうに、お前の聲もかれはてたのだらうか。遙かに川上の方から渦巻き流れて来るお前の水が有るかぎり、お前の詩がかれはてよ

鳥の嘴と脚と赤  
 き川のほとりに  
 遊びけり京には  
 見えぬ鳥なりけ  
 れば皆人見知ら  
 ず渡守にこれは  
 何鳥ぞと問ひけ  
 ればこれなむ都  
 鳥といひけるを  
 聞きてよめる  
 名にしおはばい  
 ざこと問はむ都  
 鳥わが思ふ人は  
 ありやなしやと  
 (古今集)

うとはどうしても思はれない。私はお前から溢れて来る詩を知りたい。お前の沈黙を破つた聲を聞きたい。随分お前も長い目で岸の變遷を眺めて来た。兩岸が武藏野であつた昔からのお前だ。そこに建てられた大きな都の發達を知悉して来たお前だ。舊兩國が一切の交通の中心で、用をたすにも、物を運ぶにも、舟の便利によらなければならぬ時代からのお前だ。お前は驚くべき大改革を眼のあたりに見て来た。江戸の崩壊を、政治の改變を、憲法の制定を。廣く知識を世界に求めよう、世界のありとあらゆる處から採り得る限のものを採らう、これがお前の見た維新當時に於ける熾盛な精神ではなかつたか。新しいものが、かくしてお前の岸へ押寄せて来た。亞米利加からも、佛蘭西からも、英吉利からも、獨逸からも。そして



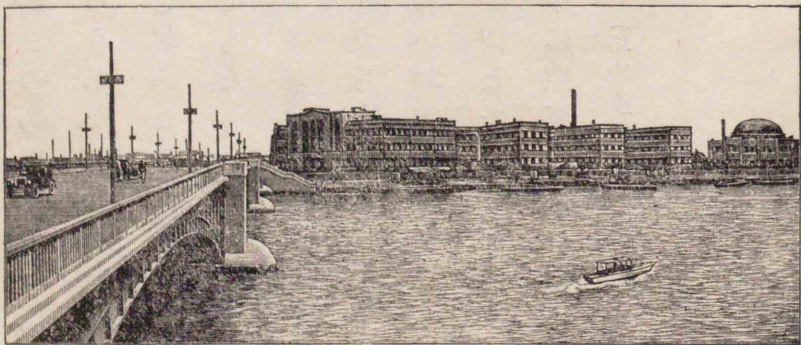


昔の隅田川 安藤重筆

改良に次ぐに改良、破壊に次ぐに破壊を以てした結果、それらの性質を異にしたものが、各自思ひくゝの様式と主張と確執とをもつて雑然紛然たること、恰も植民地の町を見るごとくにお前の兩側に移植された。時代の象徴とも見るべき造形美術、殊に建築を見渡すと、お前の岸にあつたものが餘りに溫和ワカしく、餘りに弱々しく、餘りに繊細で、新しく西洋から入つて來た組織的なものの爲に何となしく蹂躪ソウロクされてしまふやうな氣がして、傷ましくてならない。今になつてこの不

クラシック  
古典

調和を歎くのは遅いかも知れない。しかし、われくゝ日本人が餘りにクラシクを捨過ぎたと氣づくことは決して遅いとは言へない。われくゝは廣く知識を世界に求める程の銳意と同情とに富んで居る。唯われくゝはそれを受容れるに當つて、強い判斷力を缺いた。言葉を換へて言へば、歴史的の意志を缺いた。それがわれくゝの缺點だ。われくゝは自己の支配者では無くなつてしまつてゐた、唯新しいものの入つて來るに任せてゐた。お前の岸にある不思議な不統



今の隅田川







庚子十一月

亥

亥

亥

亥

亥

亥

亥

亥

今兒到

十月廿三日

午

午

午

午





広島大学図書

2000302041

